

# 居住地校交流実施の手引

## 【改訂版】

～共に学び 互いを認め合える社会を目指して～

平成 2 8 年 3 月

福岡県教育委員会

## はじめに

平成26年1月、我が国が批准した「障害者の権利に関する条約」は、全ての障害者によるあらゆる人権及び基本的自由の完全かつ平等な享有を促進し、保護し、及び確保すること並びに障害者の固有の尊厳の尊重を促進することを目的として、いわゆる「合理的配慮」や教育における「インクルーシブ教育システム」等の理念が提唱されています。

我が国では、平成23年に障害者基本法が改正され、「障害者である児童及び生徒と障害者でない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めること」が規定されました。また、平成24年7月には、中央教育審議会初等中等教育分科会から、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」が報告され、その中で、「特別支援学校における、居住地校との交流及び共同学習は、障害のある児童生徒が、居住地の小・中学校等の児童生徒等とともに学習し交流することで地域とのつながりを持つことができることから、引き続きこれを進めていく必要があること」が示されました。

本県においても、障害の有無にかかわらず、誰もが共に学び、互いを認め合える社会の実現を目指していくことが重要であると考えており、そのためには、障害のある子どもの居住地における交流及び共同学習(以下「居住地校交流」という。)を着実に進めていく必要があると考えています。そこで、平成24～26年の3か年にわたって「障害のある子どもの居住地校交流事業」を実施し、その仕組みを整備するとともに、「居住地校交流実施の手引」を作成しました。平成27年4月より、この手引に基づいて各学校で居住地校交流を行い、実施上の課題を整理し、このたび手引を改訂しました。

手引には、各学校において、居住地校交流が円滑かつ適切に実施できるような内容を示すとともに、児童生徒一人一人の障害の状態や教育的ニーズに応じて提供される「合理的配慮」を明らかにした実践事例についても掲載しています。

各学校においては、インクルーシブ教育システムの理念とその重要性を御理解いただくとともに、この手引を積極的に活用して居住地校交流を実施することにより、全ての子どもたちが豊かな人間性をはぐくんでいくことを期待します。

最後に、居住地校交流研究協議会の委員の皆様をはじめ、モデル地域の関係市町教育委員会、県立特別支援学校の協力を得て、本手引を作成できましたことに、心より感謝申し上げます。

平成28年3月  
福岡県教育委員会

# 目 次

<b>1 交流及び共同学習の意義</b>	<b>3</b>
(1) 共生社会の形成に向けて	3
(2) 居住地校交流とは	4
(3) 教育課程上の取扱い	4
<b>2 居住地校交流の進め方</b>	<b>6</b>
(1) 居住地校交流実施の流れ	6
(2) 具体的な体制づくり	8
ア 特別支援学校（在籍校）	
イ 小・中学校（居住地校）	
(3) 交流及び共同学習の進め方	11
(4) アセスメント	12
(5) 計画（Plan）	14
ア 年間指導計画の作成	
イ 活動ごとの指導計画の作成	
(6) 実施（Do）する際の留意事項	17
ア 障害種別の留意事項	
イ 合理的配慮について	
(7) 評価（Check）と改善（Action）	21
<b>3 実践事例</b>	<b>22</b>
(1) 視覚障害 小学部 一般学級 3年生	22
(2) 聴覚障害 小学部 一般学級 2年生	27
(3) 知的障害 小学部 重複学級 3年生	34
(4) 知的障害 小学部 一般学級 5年生	41
(5) 知的障害 小学部 重複学級 6年生	48
(6) 知的障害 中学部 一般学級 1年生	55
(7) 肢体不自由 小学部 一般学級 4年生	60
<b>4 居住地校交流に関するQ &amp; A</b>	<b>66</b>
<b>資料編</b>	

# 1 交流及び共同学習の意義

## (1) 共生社会の形成に向けて

福岡県では、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える全員参加型の共生社会の実現を目指しています。そのためには、障害のある人と障害のない人が、互いを理解し合うことが不可欠です。そこで、子どもの頃から、互いにふれ合い、共に学ぶ機会を設けることが大切になります。

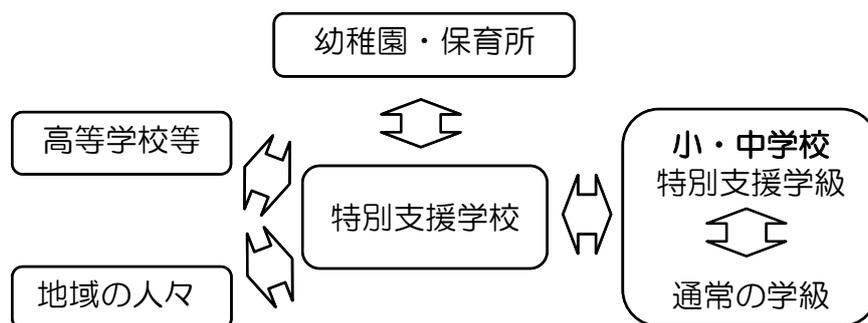
### 「交流及び共同学習」の考え方

障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする「交流」の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする「共同学習」の側面があるものと考えられます。「交流及び共同学習」とは、このように両方の側面が一体としてあることをより明確に表したものです。

特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚園・小学部・中学部）

平成21年6月 文部科学省

交流及び共同学習は、地域や学校の実態に応じて、様々な活動が進められています。活動の形態としては、学校行事や一部の教科で活動を共にする「直接的」な活動や、学級通信や手紙の交換などの「間接的」な活動等、多様な形態があります。また、交流及び共同学習は、以下のように様々な学校教育の場において行われています。



交流及び共同学習は、障害のある子どもの自立と社会参加を促進するとともに、障害のない子どもにとっても、社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ機会となり、ひいては共生社会の形成に役立つものです。

## (2) 居住地校交流とは

### 「居住地校交流」とは

交流及び共同学習の形態の一つに、特別支援学校に通う児童生徒が、授業の一環として自分の住んでいる地域の小・中学校等の学校行事に参加したり、一部の教科等の学習を共に行ったりする「居住地校交流」があります。

障害のある子どもたちにとっては、地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きることができるよう、地域の同世代の子どもたちとの交流等を通して、地域での生活の基盤を形成することが大切です。また、障害のない子どもたちには、地域社会の中で、共に助け合い支え合って生きていくことの大切さを学んだり、思いやりの心を育てたりすることが求められています。

## (3) 教育課程上の取扱い

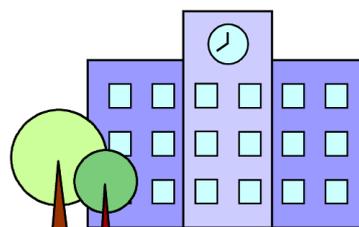
交流及び共同学習は、授業時間内に実施する場合、児童生徒の在籍する学校の授業として位置付けられていることに十分留意し、教育課程上の位置付け、指導の目標などを明確にし、適切な評価を行うことが必要です。

在籍校の授業であるということは、基本的には、在籍校の教員が指導を行うこととなりますが、具体的な指導形態等については、在籍校の教育活動の一環であることを考慮し、学校間で十分協議の上、児童生徒の個々の実態に即して適切に実施する必要があります。

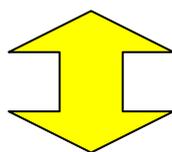
また、交流及び共同学習は、本来、子どもの在籍校の授業として実施されるものなので、在籍校が教育活動としての適切な評価を行う必要があります。あらかじめ活動のねらいや評価方法等について、学校間で十分な打合せをすることが大切です。特に、教科等の授業においては、児童生徒の個別の指導計画に基づき、指導の目標などを明確にしておくことが大切です。



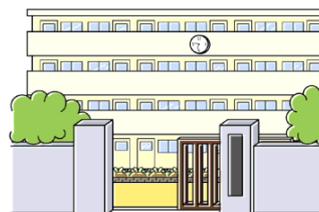
## 特別支援学校(在籍校)



- ① 在籍校の教育課程において、各教科等のどこに位置付けるかを十分検討します。
- ② 個別の指導計画に基づき、「ねらい」を明確にします。
- ③ 計画の立案に当たっては、在籍校における当該児童生徒の学習進度に支障が生じないように配慮します。
- ④ 「ねらい」に基づき、適切に評価します。



## 小・中学校(居住地校)



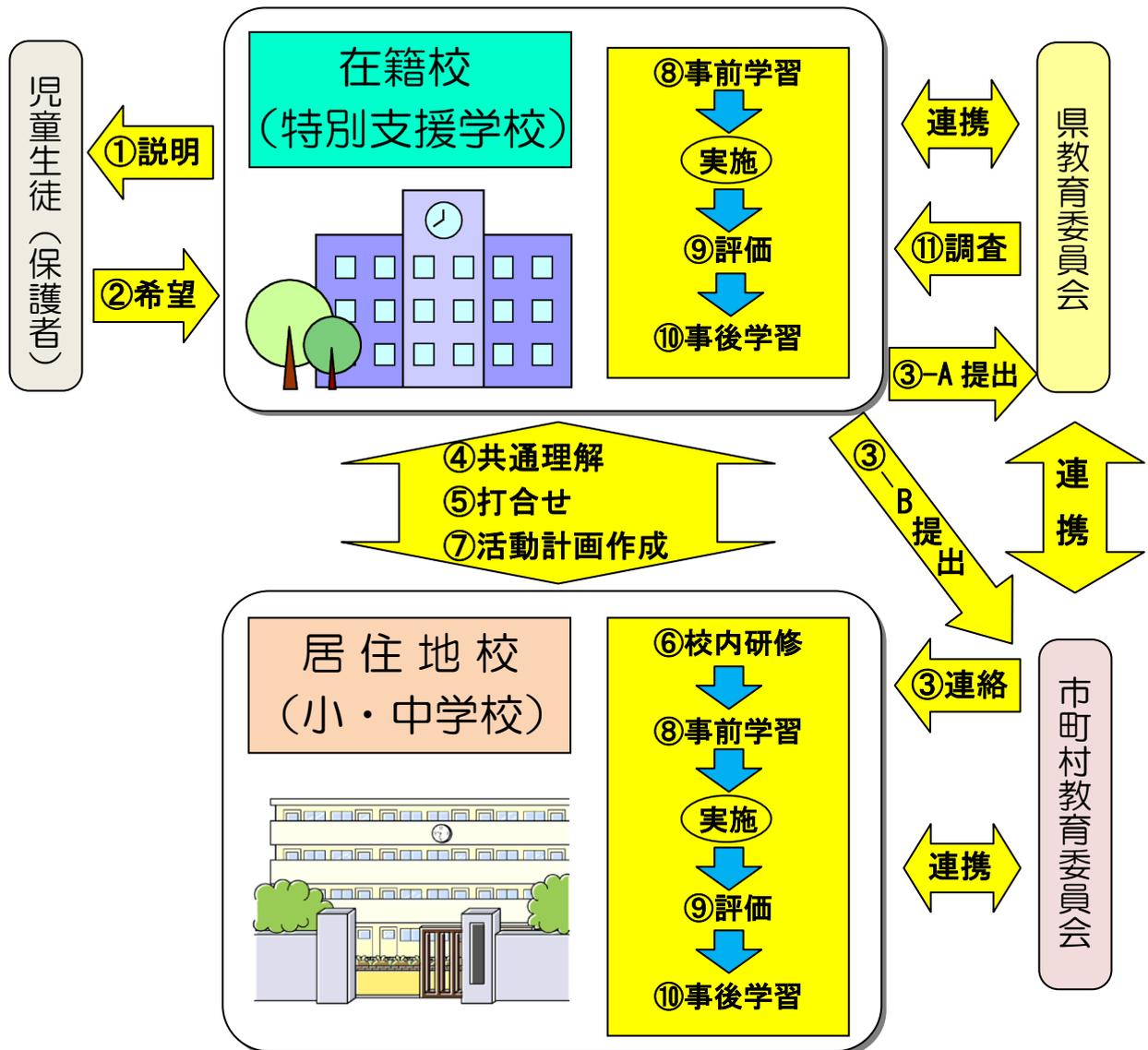
- ① 年間指導計画等に付加するなど、計画的に実施します。
- ② 居住地校の児童生徒にとっての「ねらい」を明確にします。
- ③ 「ねらい」に基づき、適切に評価します。

居住地校交流は、障害のある子どもが、その生活の基盤である地域に設置された学校の児童生徒と交流することから、子どもの活動が地域社会における活動へと、その幅を広げやすいものです。学校で行う交流及び共同学習が、地域社会における子どもの積極的な関わりへと発展するような活動を計画することも大切です。障害のある子どもが、将来、地域社会において自立し社会参加できるよう学校教育段階における居住地校交流の充実が期待されます。

## 2 居住地校交流の進め方

### (1) 居住地校交流実施の流れ

ア 市町村立小・中学校との居住地校交流実施の流れ（福岡市を除く）



#### 在籍校（特別支援学校）

- ① 在籍校は、居住地校交流の実施について保護者に説明等を行う。
- ③-A 【北九州市の場合】在籍校は、保護者の意向を確認し、様式 A を県教育委員会に提出する。
- ③-B 【北九州市以外の市町村の場合】在籍校は、保護者の意向を確認し、様式 B を市町村教育委員会に提出する。
- ⑧ 事前学習を行う。
- ⑨ 実施の際は、それぞれの児童生徒を適切に評価する。（参考様式5号）
- ⑩ 事後学習を行う。

## 居住地校（小・中学校）

- ⑥ 居住地校は、必要に応じて校内研修等を行い、職員の共通理解を図る。
- ⑧ 事前学習を行う。
- ⑨ 実施の際は、それぞれの児童生徒を適切に評価する。（参考様式5号）
- ⑩ 事後学習を行う。

## 在籍校（特別支援学校）及び居住地校（小・中学校）

- ④ 在籍校と居住地校の校長は、それぞれの学校の状況、当該学級の実態、児童生徒の障害の状態等を勘案し、共通理解を図った上で、実施について協議する。
- ⑤ 在籍校と居住地校は、事前に十分打合せを行い、適切な活動内容及び実施回数等を決定する。（参考様式2号・3号）
- ⑦ 在籍校と居住地校は、打合せの上、活動計画を作成する。（参考様式4号）

## 児童生徒（保護者）

- ② 保護者は、居住地校交流を希望する場合、在籍校に意向を申し出る。（参考様式1号）

## 県教育委員会

- ⑪ 県教育委員会は、居住地校交流の状況を把握するため、在籍校に対して調査を行うと共に、市町村教育委員会等に対して、必要な情報提供を行うなど、連携を密にする。

## 市町村教育委員会

- ③ 市町村教育委員会は、在籍校（特別支援学校）からの希望を居住地校に連絡したり、在籍校と居住地校との間をコーディネートしたりするなど、居住地校交流が円滑に実施できるよう、連携を密にする。

## イ 福岡市立小・中学校との居住地校交流実施の流れ

福岡市では、「ふくせき制度※」に基づく居住地校交流が行われています。県立特別支援学校においても、福岡市に居住する児童生徒については、「ふくせき制度」に準じて居住地校交流を実施しています。そのため、福岡市立の小・中学校において居住地校交流を実施する際は、下記のような流れで実施します。

① 在籍校（特別支援学校）は、居住地校交流の希望を集約し、希望する児童生徒の名簿（関係校に別途通知）を県教育委員会に提出する。

② 県教育委員会は、福岡市教育委員会へ希望する児童生徒の名簿を送付・合議し、在籍校（特別支援学校）へ実施了解について連絡する。

③ 在籍校（特別支援学校）は、居住地校へ計画書（関係校に別途通知）を送付する。

④ 居住地校は、在籍校（特別支援学校）へ承諾の連絡（関係校に別途通知）を行う。

⑤ 在籍校（特別支援学校）と居住地校は、事前に十分打合せを行い、適切な活動内容及び実施回数等を決定する。

⑥ 在籍校（特別支援学校）は、交流教育授業計画書（関係校に別途通知）を居住地校と共同で作成し、原本を県教育委員会に提出する。  
居住地校は、交流教育授業計画書の写しを福岡市教育委員会に提出する。

⑦ 在籍校（特別支援学校）と居住地校は、それぞれ事前指導を行い、居住地校交流を実施する。  
在籍校（特別支援学校）と居住地校は、それぞれ評価・事後指導を行い、両校で反省を行う。

※「ふくせき制度」の詳細については福岡市教育委員会にお尋ねください。

## (2) 具体的な体制づくり

交流及び共同学習の実施に当たっては、様々な活動を効果的かつ円滑に進めるため、双方の学校において、組織的に実施することが必要です。

また、活動が効果的に実施されるかどうかは、両校の組織の有機的な連携や協力体制にかかっています。そのため、両校の教職員や担当者が、互いの学校や学級、子どもたちの状況を正しく理解したり、実施後に反省会を行ったりするなど、関係者の共通理解を深めることが必要となります。

### 在籍校と居住地校をつなぐ役割

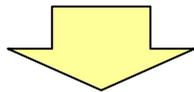
居住地校交流を円滑に実施するためには、キーマンの存在が欠かせません。在籍校と居住地校をつなぐキーマンとして、管理職や特別支援教育コーディネーターなどがその役割を担い、リーダーシップを発揮したり連絡調整を行ったりするなど、学校間の連携を図ることが大切です。居住地校交流を実施するに当たっては、どのようなスケジュールで打合せを行っていくのかなど、年度当初の適切なコーディネートが重要となります。

また、場合によっては、市町村教育委員会の担当者が、在籍校と居住地校をつなぐコーディネーターとしての役割を担うことも考えられます。

### ア 特別支援学校（在籍校）

#### ① 校内組織づくり

- 所属学部や校内交流委員会などによる組織的な取組
  - ・ 学級担任や特別支援教育コーディネーター等を中心とした校内体制の整備
  - ・ 関係者の共通理解
  - ・ 管理職のリーダーシップ



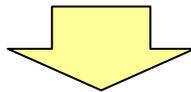
#### ② 支援体制づくり

- 居住地校交流の実施に伴う時間割の変更や調整
- 担任等の付添に伴う支援体制の検討と時間割の変更
- 送迎等に係る保護者の協力
- 担任等の付添に伴う当該学級への支援

イ 小・中学校（居住地校）

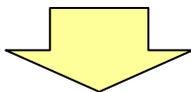
**① 児童生徒の状況の把握**

- 在籍校（特別支援学校）との情報交換
  - ・ 障害の状態など
  - ・ 在籍校における学習や生活の様子
  - ・ 在籍校児童生徒及び保護者の願いや希望
  - ・ 実施に当たっての留意事項 その他



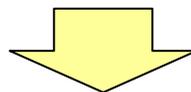
**② 校内における理解・啓発**

- 教職員、保護者、校内の児童生徒への理解啓発
  - ・ 教職員による共通理解のための研修の実施
  - ・ 保護者、校内の児童生徒に対する理解啓発（学校だより等） その他



**③ 支援体制づくり**

- 管理職のリーダーシップ
- 特別支援教育コーディネーター等を中心とした校内体制の整備
- 交流学級の決定及び同学年の協力体制
- 対象児童生徒が安全に活動するための校内協力体制の検討

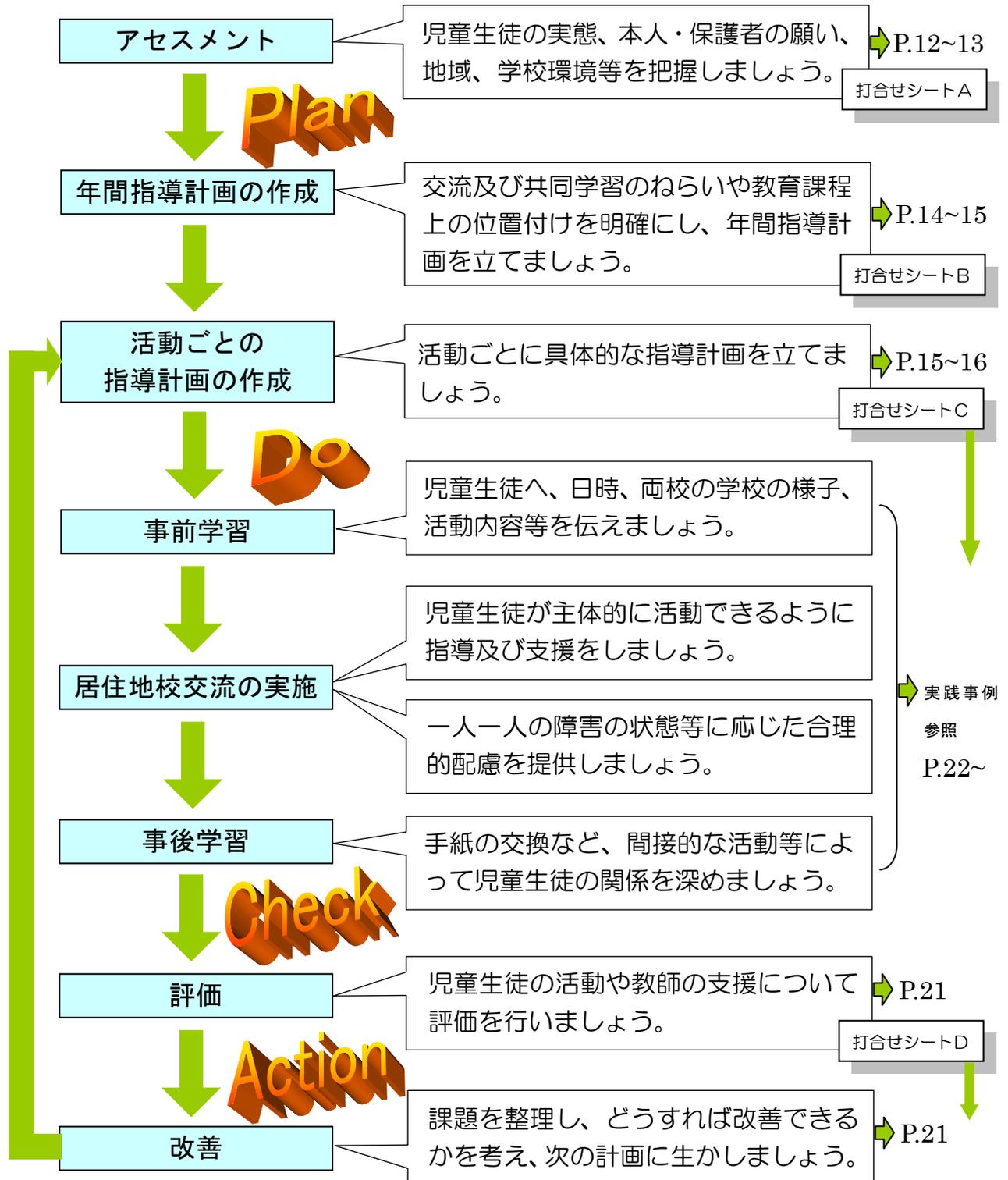


**④ 実施体制づくり**

- 安全に活動するための環境の整備
- 必要な合理的配慮の提供
- 緊急時対応における協力体制の確認

### (3) 交流及び共同学習の進め方

交流及び共同学習を進めるに当たっては、計画の立案（Plan）－授業実践（Do）－活動の評価（Check）－改善（Action）のマネジメントサイクルで活動し、その内容や教師の支援方法等を改善していくことが望まれます。



## (4) アセスメント

交流及び共同学習を進めるに当たっては、まず、在籍校と居住地校が十分に打合せを行い、アセスメントに関する共通理解を図ることが必要です。

在籍校及び居住地校の児童生徒の実態、双方の学校・学級の状況、配慮事項、居住地校の施設設備などについて、「打合せシートA【アセスメント】」を活用し打合せを行うことで、交流及び共同学習を適切かつ安全に実施するために必要な内容に関して共通理解を図ることができます。

### 打合せシートA活用例

障害名等を記入。身辺処理に関することや移動に関すること、コミュニケーション方法や集団参加の状況など、居住地校交流を実施する上で参考となる内容を記入。

1 対象児童生徒

対象児童生徒名	〇〇 〇〇	性別	( 男 ) ・ ( 女 )
《在籍校》 教育部門 学部・学年等	( 知的障害 ) 教育部門 ( 小 ) ・ ( 中 ) 学部 〇年 〇組 (学級在籍児童生徒 4名) (一般学級・重複学級・訪問教育)		
《居住地校》 学校・学年等	〇〇〇立 〇〇〇〇小・中学校 (全校児童生徒数 360名) 〇学年 〇組 (学級在籍児童生徒 30名)		
障害の状態等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的障害、自閉傾向</li> <li>・初めての場所では緊張が強く、集団活動に参加できないことがある。</li> <li>・自分の要求を動作や表情で伝えることができる。</li> </ul>		
本人・保護者が希望する内容等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の好きな教科である音楽や体育などの学習を行いたい。</li> <li>・共に体を動かす活動など、他の児童と触れ合う体験をさせたい。</li> </ul>		
安全上、特に配慮を要する事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に活動場所を点検して危険箇所がないかを確認すること。</li> <li>・学校や体育館などの活動場所の写真を準備し、どのような活動をするのか事前に知らせることで、安心して活動できるようにすること。</li> </ul>		

在籍校において、本人及び保護者から聞き取った内容を記入。

障害の状態や児童生徒の特性等を考慮し、安全に活動するための留意点を記入。施設設備関係の安全面にも配慮する。

2 居住地校の施設・設備等

確認事項	内容	備考欄
<input checked="" type="checkbox"/> 在籍校からの距離 (移動に要する時間)	約 10 km (移動に要する時間: 約 20 分)	※対象児童の自宅から居住地校までの距離 約2 km
<input checked="" type="checkbox"/> 移動手段	徒歩 (自家用車) ( )	
<input checked="" type="checkbox"/> 駐車可能スペース	(有) ・ 無	
<input checked="" type="checkbox"/> スロープ	(有) ・ 無	
<input checked="" type="checkbox"/> エレベーター等	(有) ・ 無	
<input checked="" type="checkbox"/> トイレ	(和式) (洋式) (車椅子対応)	
<input checked="" type="checkbox"/> 実施場所	1 階	
<input checked="" type="checkbox"/> 保健室の借用	(可) ・ 不可	
<input checked="" type="checkbox"/> 緊急時の病院	〇〇大学病院 (TEL: 123-456-7890)	※対象児の主治医 (〇〇)
<input type="checkbox"/> その他		

アセスメントに関する打合せの際は、両校が、年間の活動を見据えたそれぞれの指導方針などを出し合い、共通理解を図っておくことが大切です。

打合せシートA活用例

3 確認事項		
	確認事項	記述欄
在籍校	<input checked="" type="checkbox"/> 配慮を要する事柄の整理 居住地校への連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・慣れない場所では落ち着かないことが多い。</li> <li>・初めての集団での活動には参加できないことがある。</li> <li>・明瞭に発音することが難しく聞き取りにくい言葉がある。</li> <li>・少しの段差であってもつまずきやすい。</li> <li>・順番を守って活動することが難しいことがある。</li> <li>・音楽に合わせて体を動かすことが好きである。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 実施計画に関する教員の共通理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部会や校内交流委員会に実施計画を提案し、職員の共通理解を図る。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 対象児童生徒への事前指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の見通しをもたせるため、事前に居住地校の写真などを準備し、視覚的な教材・教具を使った指導を行う。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 対象児童生徒への事後指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感想文を書くことで活動の振り返りを行い、居住地校へ送付する。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 対象児童生徒の評価の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個別の指導計画に基づいて評価を行い、記録欄に記載する。</li> </ul>
居住地校	<input checked="" type="checkbox"/> 配慮を要する事柄の把握 手立ての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校や教室などの活動場所や交流学級の児童の写真などを準備する。</li> <li>・対象児とのコミュニケーションがスムーズにとれない場合は、特別支援学校の教員に支援をお願いする。</li> <li>・教室移動の際は、特別支援学校の教員が児童の側につくなど転倒しないよう気を付ける。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 教職員、保護者等への理解啓発	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修会を行い、対象児童の障害に関する職員の理解を図る。</li> <li>・学校だよりの中に居住地校交流の内容を掲載する。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 実施計画に関する教員の共通理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年会で共通理解を図り、活動のための協力体制を確認する。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 児童生徒への事前指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象児童の特性について理解し、言葉掛けや関わり方について考えさせる事前指導を行う。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 児童生徒への事後指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象児童に対して手紙を書くことで、自らの考えを深める事後指導を行う。</li> </ul>
	<input checked="" type="checkbox"/> 居住地校児童生徒の評価の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業のめあてに基づいて自己評価を行う。</li> <li>・ねらいが達成できたかどうか、児童の言葉掛けや関わり方を分析し評価する。</li> </ul>

## (5) 計画 (Plan)

交流及び共同学習の実施に当たっては、年間指導計画や活動ごとの指導計画を作成する必要があります。その際には、教育課程上の位置付け、評価計画、交流及び共同学習の形態や内容、回数、時間、場所、双方の役割分担、協力体制等について十分検討することが大切です。「打合せシートB【指導計画の作成】」を活用し打合せを行うことで、年間の活動を見据えた計画を立てることができます。

なお、活動を継続的に実施していくためにも、両校の負担が過重にならないように留意することが必要です。

### ア 年間指導計画の作成

#### 打合せシートB活用例

1 交流及び共同学習のねらい（年間目標）				
対象児童生徒		居住地校児童生徒		
《年間目標》 ・地域の児童との交流を通して、友達に対して、自分から関わりをもちながら活動することができる。		《年間目標》 ・障害のある児童との交流を通して、違いを認め、思いやりの気持ちをもって関わるることができる。		
対象児童生徒の個別の指導計画のねらいを踏まえて設定することが大切です。		アセスメントの内容を踏まえ、双方の学校にとって有意義な活動となるよう計画することが大切です。		
2 活動計画（直接的な活動）（年間3回）				
回数	時期	場所	教育課程上の位置付け	主な内容
1回目	10月20日	居住地校教室	【在籍校】 ・生活単元学習 【居住地校】 ・学級活動	集会を通して自己紹介をしたりゲームをしたりする。
2回目	11月中旬	居住地校音楽室	【在籍校】 ・音楽 【居住地校】 ・音楽	鼓笛隊の演奏を聴いたり、リズムを覚えて合奏を楽しんだりする。
3回目	1月下旬	居住地校家庭科室	【在籍校】 ・生活単元学習 【居住地校】 ・家庭	簡単な調理をし、会食、後片付けをする。

### 3 その他（間接的な活動）

時期	主な内容
1 学期	・ 対象児童から居住地校へのビデオレター
1 学期	・ 在籍校担任から居住地校への手紙
1 学期	・ 学級だよりの交換
3 学期	・ 感想文や手紙の交換

直接的な活動の回数は限られているため、間接的な活動によって、内容を深めることができるようにすることが大切です。

## イ 活動ごとの指導計画の作成

活動ごとの指導計画を作成するに当たっては、アセスメントに関する打合せの際、共通理解を図った指導方針に基づいて、事前学習、本時の活動、事後学習の内容を具体的に計画することが大切です。「打合せシートC【活動ごとの指導計画の作成】」を活用し、双方の学校が十分に打合せを行いながら、協働作業によって計画書を作成するという意識をもつことが大切です。

### 打合せシートC活用例

#### 1 事前学習

対象児童生徒	居住地校児童生徒
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5W1Hに基づき活動内容を確認する。</li> <li>・ 事前に居住地校の写真などを見ておくことで活動の見通しをもつ。</li> <li>・ 活動の順序を絵カードによって確認する。</li> <li>・ 自己紹介やテーマソングの練習をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象児からのビデオレターを視聴したり、特別支援学校担任からの手紙を読んだりすることで、対象児が好きなことや配慮しなければならないことについて知り、ゲームの内容を考える。</li> <li>・ 集会に使用する飾りを作る。</li> </ul>

#### 2 活動計画（案）

〇〇市・町立〇〇〇小・中学校 指導者 〇〇 〇〇  
 （県立〇〇特別支援学校 指導者 〇〇 〇〇）

- (1) 題材・単元名 学級活動 「はじめまして集会」
- (2) 本時 平成 25 年 10 月 20 日（水） 9：30～10：15 5 年 2 組教室にて
- (3) 本時のねらい

対象児童生徒	居住地校児童生徒
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 居住地校児童と共に自己紹介やゲームをすることができる。</li> <li>・ 居住地校児童の言葉掛けに応じて、ゲームなどの活動することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象児童との関わり方を考えたり一緒に活動したりすることを通して、対象児童の好きなことやできることを知り、良さに気付く。</li> </ul>

(4) 本時の展開

過程	学習活動・内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 本時学習のめあてをつかむ。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">             めあて 楽しく安全に気を付けて活動し、仲よくなろう。           </div>	○ 全体のめあてや各自のめあて、内容については事前に話し合い、準備しておく。
展開	2 「はじめまして集会」をする。  [プログラム]  ① はじめの言葉 ② お迎えの言葉  ③ ○○さんの自己紹介  ④ テーマソング  ⑤ ゲーム ・ 仲間集めゲーム ・ かもつ列車  ⑥ インタビュー  ⑦ おわりの言葉	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin-bottom: 10px;">             合理的配慮の観点（19 ページ参照）を【 】内に記載し、指導の際、合理的配慮の提供を意識できるようにしましょう。           </div> ◎ ○○さんに分かりやすく伝えるため、カードを使うなど発表の仕方を工夫させる。 【①-2-1】 ◎ 必要に応じて特別支援学校の教員が言葉掛けを行うなどの支援を行う。 【①-2-1】 ○ 練習してきた部分を役割分担して歌うようにする。 ○ ゲーム中、一人で活動する友達がいなかどうか配慮させる。 ○ ○○さんにも感想を述べてもらうことを事前に確認しておく。 ◎ 先に友達の発表を聞く機会を設定することで、○○さんが感想を述べやすくする。 【①-2-1】
まとめ	3 本時のまとめをする。	○ 特別支援学校の教員より気付いたことを話してもらう。 ○ 関わり方でよかったところ等を賞賛するとともに次回の活動を知らせる。

3 事後指導

対象児童生徒	居住地校児童生徒
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5W1Hに基づき当日の振り返りを行う。</li> <li>・ 写真を見ることで、活動内容を想起する。</li> <li>・ 感想文を書き、居住地校へ届ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各自のめあてが達成されたかどうか、振り返りを行う。</li> <li>・ 楽しかった思い出を手紙に書き、在籍校へ届ける。</li> </ul>

## (6) 実施(Do)する際の留意事項

### ア 障害種別の留意事項

障害のある子どもに関わる際は、障害の特性等に応じてそれぞれ配慮が必要です。交流及び共同学習を実施する際の主な留意事項について、障害種別に記述します。

#### 視覚障害

- ① 教材等を提示する場合、言葉での説明を添えるとともに、手で触って観察できるようにする。
- ② 「そこ」、「あそこ」などの指示代名詞の使用を避け、「右手前」などと具体的に指示する。
- ③ 慣れない場所に行ったり、初めて体験したりするときには、最初に周囲の状況や活動内容を説明したり、一緒に歩きながら案内したりする。
- ④ 文字カード等を提示する際には、コントラストをはっきりさせ、適切な文字の大きさで書くとともに、照明などに配慮して見やすくする。
- ⑤ 視野が狭い場合には、横から近づいてくるものに気付かなかったりすることがあるので、本人の正面から話しかけたり歩み寄りしたりするよう心がける。

#### 聴覚障害

- ① 子どもが話し手の方を向いているときに、話し手は、自分の顔全体、特に口元がはっきりと見えるように話しかける。
- ② 補聴器等で聞き取りやすいように、必ず声を出して話す。口だけを動かしたり、大声を張り上げたりしないようにする。
- ③ 話が通じにくい場合には、子どもの手のひらに指でゆっくりと文字を書いたり、空書したり、紙に書いたりして確認するようにする。子どもによっては、指文字や手話を活用したコミュニケーションに努める。
- ④ 活動の流れを確認したり、話し手の方を見たりするために子どもが横や後ろを見たりする場合がありますので、それを認めるようにする。
- ⑤ できるだけ板書や実物、指文字などを利用するなどして、視覚的な手がかりをもとに活動の流れを把握できるようにする。

## 知的障害

- ① 興味・関心をもつことのできる活動を工夫する。
- ② 言葉による指示だけでなく、絵や写真などを用いたり、モデルを示したりすることによって、内容を具体的に伝え理解しやすくする。
- ③ 繰り返してできる活動にしたり、活動の手順を少なくしたり、絵や写真などを用いて手順が分かりやすくなるようにしたりして、見通しをもちやすくする。
- ④ 得意とする活動や、普通の授業で体験したことのある活動を行うようにして、活躍できる場を設ける。
- ⑤ 子どもの行動の意味や背景などを必要に応じて適切に説明するなどして、子ども同士が理解し合いながら友達になれるようにする。

## 肢体不自由

- ① 歩行を妨げたり、ぶつかったりしないように注意する。
- ② 車いすや杖等を使用する子どもが階段や段差のあるところで困っている場合には、どうしたらよいかを尋ね、それぞれの子どもに合った方法で援助する。また、必要に応じて周囲の人達の協力を求め、安全な方法で介助する。
- ③ 車いすを押す場合はゆっくりと押す。その際、前方・側方の距離を十分に保ち、車いすや本人の体が人や物にぶつからないよう注意する。
- ④ 段差のある場所や坂道で車いすを押す場合は、必ず教員が付き添い、後ろ向きに進むなど、状況に応じた安全な押し方をする。
- ⑤ 話をする時は、それぞれの子どもの目の高さに合わせるように努め、気持ちを伝えるようにする。



## 病弱・身体虚弱

- ① 活動に当たっては、保護者、担当医、教師などに個々の子どもの病状等に関する禁止事項等を確認する。
- ② てんかんや気管支ぜん息等のある子どもは、発作がないときには他の子どもとほぼ同じ程度の活動が可能であるが、過重な負担にならないように留意する。
- ③ 病気によっては急に不調になることもあるので、活動中も体調の変化に十分に注意するとともに、個々の病状や体力に応じた活動を工夫する。
- ④ 筋力低下や骨折等を伴うことが多い疾患のある子どもについては、無理な運動にならないように留意し、主体的な活動ができるように工夫する。
- ⑤ いじめや不登校等を経験した子どもの場合は、人との関わりを拒否することもあるので、子どもの気持ちを尊重しつつ、活動を広げていくようにする。

### イ 合理的配慮について

障害のある子どもたちの指導に当たっては、一人一人の障害の状態や教育的ニーズ等に応じた「合理的配慮」を行い、より適切な指導を行うことが必要となります。

#### 「合理的配慮」とは

「障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり、「学校の設置者及び学校に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義されています。

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）

平成 24 年 7 月 23 日 中央教育審議会初等中等教育分科会

障害のある子どもに対する支援については、国は全国規模で、都道府県は都道府県内で、市町村は市町村内で、それぞれが教育環境の整備を行います。これらは、「合理的配慮」の基礎となる環境整備（基礎的環境整備）です。これらを基に、設置者及び学校が、障害のある子どもに対し、その状況に応じて「合理的配慮」を提供することになります。合理的配慮と基礎的環境整備の関係及び学校における合理的配慮の観点、次のとおりです。

## 合理的配慮と基礎的環境整備の関係



※文部科学省説明資料より

### 学校における合理的配慮の観点

#### <観点①教育内容・方法>

##### 《①-1 教育内容》

- 【①-1-1】 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮
- 【①-1-2】 学習内容の変更・調整

##### 《①-2 教育方法》

- 【①-2-1】 情報・コミュニケーション及び教材の配慮
- 【①-2-2】 学習機会や体験の確保
- 【①-2-3】 心理面・健康面の配慮

#### <観点②支援体制>

- 【②-1】 専門性のある指導体制の整備
- 【②-2】 幼児児童生徒、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮
- 【②-3】 災害時等の支援体制の整備

#### <観点③施設・設備>

- 【③-1】 校内環境のバリアフリー化
- 【③-2】 発達、障害の状態及び特性等に応じた指導ができる施設・設備の配慮
- 【③-3】 災害時等への対応に必要な施設・設備の配慮

居住地校交流を実施するに当たっては、在籍校がもっている情報をお互い共有しながら、必要な合理的配慮が提供されるよう努めることが大切です。合理的配慮については、国立特別支援教育総合研究所がインクルーシブ教育システム構築データベースを作成し、実践事例を公開しています。

(国立特別支援教育総合研究所ホームページ <http://inclusive.nise.go.jp/>)

## (7) 評価(Check)と改善(Action)

居住地校交流においては、対象児童生徒の在籍校である特別支援学校と居住地校である小・中学校が連携して評価に当たることが求められます。

実際の評価に当たっては、活動計画(案)の作成の際設定したそれぞれのねらいに基づき、児童生徒の変容等について振り返り、評価を行うことが重要です。

また、児童生徒の活動の評価だけでなく、教師の支援など取組体制そのものを評価することも重要です。

「打合せシートD【評価・改善】」を活用し、下記のような観点で評価することで、改善点を明らかにし、次の計画に生かすことができます。

### 打合せシートD活用例

#### 1 教師の支援の振り返り

指導の観点	記述欄
<input checked="" type="checkbox"/> 本時のねらいは達成できたか。	○事前に絵カードなどを使って集会の内容を確認したことで、対象児が見通しをもって活動に参加することができた。 ○自己紹介やテーマソングの練習を事前に行ったことで、対象児が自信をもって活動することができた。 ○対象児からのビデオレターや担任からの手紙を基に集会の計画を立てたことにより、対象児との関わりについて考えることができた。また、楽しめる集会を企画することができた。 ●学習の振り返りの時間を十分に確保することができなかった。
<input checked="" type="checkbox"/> 本時のねらいは適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 活動内容は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 教材・教具は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 教示方法は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 子どもへの支援は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 安全面の配慮は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 教師間の連携はとれたか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 場面設定は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 時間配分は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 活動場所・施設は適切であったか。	
<input checked="" type="checkbox"/> 児童生徒の相互理解は進んだか。	

#### 2 児童生徒に関する評価

対象児童生徒	居住地校児童生徒
○友達に対して、自分から「一緒にやろう」、「名前は何？」など声を掛けることができた。 ○大きな声でテーマソングを歌うなど、自信をもって意欲的に活動できた。 ●何をしてもよいか分からないとき、指示や支援を待っていることがあった。	○対象児の良さに気づき、一人一人が自分にできることを考えて行動することができた。 ●「交流のめあて」はよく意識できていたが、「学級活動」のめあてが十分に意識できていなかった。

#### 3 次回に向けての改善点

- ・ 交流及び共同学習のめあてだけでなく、教科等学習のめあてを意識させ活動させる。
- ・ 学習の振り返りの時間を十分確保する。
- ・ 対象児童がより多くの友達に自分から関わることができるような活動場面を設定する。

### 3 実践事例

#### (1) 「視覚障害」小学部（一般学級）3年生児童

対象児童は、特別支援学校（視覚障害）の一般学級に在籍する3年生です。弱視の児童であり、教科学習では拡大教科書（22～26pt）を使用しています。また、板書を視写するときなどは、単眼鏡を使用しています。

対象児童の居住地校は、全校児童数505名の小学校です。交流する3年生の学級は3学級あります。

#### 昨年度までの状況

対象児童は、2年生であった昨年度、次のような年間目標を設定し、算数、音楽、体育などの教科学習や秋の遠足（雨天のため校内遠足）の行事において、居住地校交流を3回実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・自分の居住地について関心をもち、地域の友達との関わりを深めることができる。	《年間目標》 ・校区に住む児童のことを知り、一緒に学習したり遊んだりすることを通じて、学校外で出会っても交流することができる。

#### 〔活動計画〕

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
7月	音楽室 プール	(在籍校) 音楽、体育 (居住地校) 音楽、体育	リズムに合わせた身体表現活動 水遊び（水泳）
10月	教室 体育館	(在籍校) 行事 (居住地校) 行事	雨天のため校内遠足 レクリエーション、ゲーム
2月	教室 体育館	(在籍校) 算数、体育 (居住地校) 算数、体育	ものさしを使った長さの学習 ルールを変更したゴールボール

居住地校交流における対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○ゲームの際、友達と手をつなぐなど、友達と関わる意識をしっかりとって活動することができた。	○ゲームやゴールボールなどを通して、視覚障害のことについて体験的に感じ取ることができた。

3回目の居住地校交流では、対象児童から交流を楽しみにする言葉が何度も聞かれ、居住地校の友達に会えることを心待ちにしている様子が感じられました。在籍校担任、居住地校担当者は、今後に向けて、友達同士で関わる時間を増やすことを確認しました。

## 本年度の年間目標

本年度は、様々な教科等の学習に参加することや、給食や休み時間、掃除時間を含めた長時間の交流を行うことなど、保護者の願いを基に、次のような年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・地域の友達との交流を通して、同世代の児童との関わりを広げることができる。	《年間目標》 ・校区内に住む対象児童と進んで関わりをもちながら、共に遊んだり学習したりすることができる。

年間目標を基に、本年度は、全校集会や音楽、図工など様々な教科学習において、居住地校交流を実施することとしました。また、給食や休み時間などの自由な時間の中で交流を行うことで、友達同士の関わりを増やしていくことを確認しました。

## 居住地校交流の実際

6月（1回目）

### 特別活動 全校集会「アドベンチャー集会」〔1～2校時〕

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 特別活動 《本時のねらい》 ・縦割り班があることを知り、友達と一緒に校内を回って様々なゲームに挑戦することができる。	《教育課程上の位置付け》 特別活動 《本時のねらい》 ・全校の児童が協力してゲームを行い、お互いを認め合ったり仲良くなったりすることができる。

具体的な手立てとして、長時間安心して過ごすことができるように、対象児童のために靴箱や棚などを準備しておくことを確認しました。また、より多くの友達と関わるができるよう、全校集会の際、自己紹介の場面を設定することとしました。

校内を回る際は、縦割り班の上級生の指示のもと、ペアを組んだ児童と共に活動するなど、安全面に気を付けながら活動することを確認しました。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 全校集会で自己紹介をする。	○先に校長先生が紹介を行い、自己紹介しやすい雰囲気をつくる。
展開	2 校内の各所でゲームを行う。 (1) ルールの説明を聞く。 (2) 各教室の16のゲームコーナーでゲームをする。	○より多くの友達と関わりがもてるように配慮する。 ◎廊下や階段の照明を点灯することで安全に移動できるように配慮する。【③-2】
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○ルールを守って楽しく活動できたかどうか振り返りの観点を伝える。

全校集会では、居住地校の校長先生からの紹介の後、堂々と自己紹介をすることができました。また、ゲームのルール説明を聞き、友達と一緒に校内を回り、様々なゲームを楽しむことができました。

一方で、全校児童が一斉に活動したため、移動やゲームの際、混雑して動きづらかったようです。移動の際は、安全面に気を付けることを担当者同士で再度確認しました。



自己紹介をする対象児童

### 算数 題材「1億までの数」〔3校時〕

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 算数 《本時のねらい》 ・万の位までの数について大小比較ができ、数直線上の表したり、数直線上の数を読み取りすることができる。	《教育課程上の位置付け》 算数 《本時のねらい》 ・万の位までの数について大小比較ができ、数直線上の表したり、数直線上の数を読み取りすることができる。

特別支援学校では、多くの友達と共に教科学習を行う経験が少ないこともあり、算数の授業では、全体の前で発表する場面を設定したり、全体の学習進度から遅れないように言葉掛けをしたりすることを確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 めあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">                     十万の位までの数の大小をくらべよう。                 </div>	○既習事項を確認する。
展開	2 野球場の観客の数の大小をくらべる。 (1) 数字でくらべる。 (2) 数直線上の数を読む。 (3) 数を数直線上に表し、くらべる。	◎黒板の文字は大きく、見やすく書くよう配慮する。【①-2-1】 ◎板書を試写する際は、単眼鏡や斜面台を使用させる。【①-2-1】 
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○めあてとしていた内容が理解できたどうか確認する。

文字を大きく板書をしたことや、単眼鏡と斜面台を使用して学習したことで、対象児童は、普段の授業と同じように学習内容を理解することができました。そして、全体の児童の前で、堂々と意見を発表することができました。

一方で、対象児童が使用している拡大教科書と居住地校の児童が使用している教科書の出版会社が異なっていたため、本時までの学習の進め方に違いが見られました。そこで、今後に向け、使用する題材の選定や進め方の工夫などについて確認しました。



全体の児童の前で答えを板書する対象児童

**体育 題材「ロープリレー」〔4校時〕**

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・友達と協力しながらロープリレーをすることができる。	《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・ロープリレーに興味・関心をもち、ルールを守って楽しく活動することができる。

児童全員が、アイマスクをして走ることで、視覚に障害があると不便ではあるけれど、ルールを工夫することでみんなと同じように走れるということに気付かせることができるような内容にしました。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(◎合理的配慮及び観点)
導入	1 めあてを確認する。 アイマスクをしてロープリレーをしよう。	○視覚障害者にとって走ることは、どのようなことかについて考えさせる。
展開	2 ロープリレーをする。 (1) ルールを確認する (2) アイマスクをしないでロープリレーをする。 (3) アイマスクをしてロープリレーをする。	○手が擦れないように、ロープに通したバトンを持って走るようにする。 ◎対象児童を含めた全員がアイマスクを着けて走らせる。【①-1-2】 
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○楽しかった点や難しかった点など、感想を発表させる。

授業の初めに、在籍校担任から、視覚障害者にとって走ることはどのようなことなのかについて話をしました。ロープリレーは、対象児童にとっては慣れた種目であり、模範演技をするなど自信をもって活動することができました。体育の学習では、対象児童が活躍できる場を多く設定することができました。

一方で、授業の振り返りの時間が短くなってしまい、感想を発表する活動が十分にできませんでした。

## 居住地校交流の実施を通して

今年度1回目の居住地校交流でしたが、昨年度、仲良くなった友達から次々に声をかけられたことで、対象児童は抵抗なく登校し活動することができました。活動後の対象児童の作文には、楽しかった活動の様子が書かれていました。居住地校の児童についても、障害に対する理解が進んでいることが感じられました。また、対象児童は、保護者と共に地域行事に積極的に参加するようになっており、活動の範囲が広がりつつあります。

## (2) [聴覚障害] 小学部（一般学級） 2年生児童

対象児童は、特別支援学校（聴覚障害）の一般学級に在籍する2年生です。発音は比較的明瞭で、手話と口話を併用しています。

対象児童の居住地校は、全校児童数763名の学校です。交流する2年生の学級は39名です。

### 昨年度までの状況

対象児童は、昨年度、次のような年間目標を設定し、運動会に参加するため、事前練習が行われる体育において居住地校交流を3回実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・地域の子どもたちと触れ合うことにより人間関係を広げ、将来自立・社会参加することにつなげる。	《年間目標》 ・地域に住む特別支援学校在籍児童との交流活動を通して、障害のある人への理解を深め、対象児童を理解する契機とする。

#### [活動計画]

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
9月 (3回)	運動場	(在籍校) 体育 (居住地校) 体育	運動会の練習 (ダンス等)

居住地校交流における対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○活動自体が動きを伴い、理解しやすかった。また、周囲の児童の関わりが多くなったことでダンスにスムーズに入ることができた。回数を重ねるにつれて楽しそうに参加する様子が見られた。	○当初は、戸惑う様子が見られたものの、次第に児童の関わり方に積極性がみられるようになり、学級や学年の一員として意識する様子が見られた。

対象児童は、ビデオ映像を活用して事前にダンスの練習をしており、交流の際は、教師や周囲の児童の動きを見ながらダンスを踊ることができていました。

運動会当日は在籍校の休業日でしたが、在籍校の校長と居住地校の校長が対象児童の参加について協議し、保護者が付き添い運動会に参加しています。

全競技に参加できたことに保護者もとても喜んでいましたが、同時に児童相互のコミュニケーションの難しさも認識していたようです。対象児童の様子から、必要な情報を確保すること、場の雰囲気等についても取捨選択して伝えることが課題と考えられます。

## 本年度の年間目標

保護者は、運動会への参加と併せ、給食や休み時間、掃除時間を含め、教科の学習に参加することを希望しています。

居住地校交流が継続されることになり、在籍校担任、居住地校担当者は、これまでの実施状況や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・地域の子どもたちとの交流活動を通して、経験を増やし、社会性を養う。 ・居住地の子どもたちとの人間関係を広げ、きっかけを作る。	《年間目標》 ・聴覚に障害のある子どもとの交流活動を通して、聴覚障害について理解を深め、進んで関わろうとする態度を育てる。

年間目標を基に、本年度は、運動会の事前練習が行われる体育の他、国語・算数・生活においても、居住地校交流を実施することとしました。

在籍校担任と居住地校担当者は、1回目の実施当日、居住地校児童への事前学習を行い、対象児童に話をする際は、口を見せながら話すようにすること、後ろから呼び掛けても対象児童は分からないこと等を、在籍校担任から伝えることを確認しました。

## 居住地校交流の実際

9月（1回目）

対象児童は、体育の学習の後、国語の学習に参加します。

体育 題材「リズムに合わせておどろう」〔3校時〕

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・リズムに合わせて居住地校児童と一緒に踊ることができる。	《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・対象児童と積極的に関わりながら、リズムに合わせて踊ることができる。

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、対象児童が自宅でも表現（ダンス）の動きを予習できるように、居住地校がビデオ映像を提供しておくこと、また、実施当日は保護者にも参加してもらい、対象児童への対応の仕方について、在籍校担任や保護者から、助言を得ることを確認しています。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 本時のめあてをつかむ。 ダンスの動きをおぼえよう。	○対象児童も含めて運動会当日の演技をすることを確認する。
展開	2 リズムに合わせて踊る。 (1) 繰り返し踊る。 (2) 互いの動きを見合う。	○動きを覚えた児童がモデルとなり、個別に動きを確認できるようにする。 ◎リズムを視覚的に理解できるよう、対象児童の見やすい場所で手拍子をする。 【①-2-1】
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○次時は、運動場で当日の演技の場所を確認することを伝える。

国語 題材「運動会の招待状を書こう」〔4校時〕

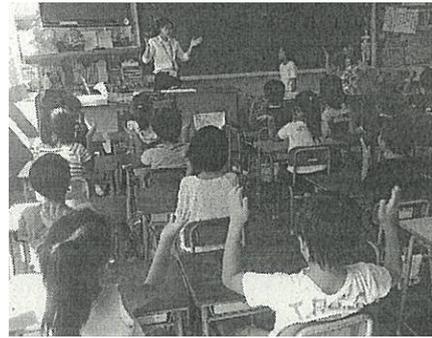
対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 国語 《本時のねらい》 ・運動会の期日や時間、内容等の大事な項目を落とさないで書くことができる。	《教育課程上の位置付け》 国語 《本時のねらい》 ・運動会の期日や時間、内容等の大事な項目を落とさないで書くことができる。

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校児童に、対象児童が補聴器を着けていることや、コミュニケーションを図る際は手話と口話を併用していることを改めて伝えておくことを確認しています。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 運動会で家の人に見て欲しいこと等を出し合い、めあてをつかむ。 しょうたいじょうをかこう。	○昨年度から関わりがある居住地校児童が対象児童の近くにいるようにする。
展開	2 必要な内容を調べて書く。 ・期日や開始時刻、プログラム等	○互いに見せ合い、大事な項目を確かめる。 ◎必要に応じ、書くことでコミュニケーションを図るよう声かけする。【①-2-1】
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○対象児童に関する気付きも書かせるようにする。

対象児童は、学年全体の場で紹介されたため、しばらく緊張した様子でしたが、交流学級で改めて紹介の場を設けたことで、その後は、意欲的に学習に取り組むことができました。国語では、対象児童が書いた運動会への思い等が紹介され、居住地校児童の対象児童への理解を深める上で効果的でした。



対象児童が交流学級で紹介される様子

この日、対象児童のFMマイクが無かったため、対象児童は、教師の指示を理解できない場面が多く見られました。在籍校担任と居住地校担当者は、FMマイクの使用の他、手話通訳やホワイトボードを用いた補助を行うことを確認しました。

### 9月（2回目）

対象児童は、前回に続く体育の学習の他、算数に参加します。

#### 体育 題材「リズムに合わせておどろう」〔3校時〕

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・リズムに合わせて居住地校児童と一緒に踊ることができる。	《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・対象児童と積極的に関わりながら、リズムに合わせて踊ることができる。

在籍校担任と居住地校担当者は、体育では、表現の他、走・競争遊技の練習を含めて行うことを対象児童に事前に伝えておくことを確認しています。

#### 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 本時のめあてをつかむ。 運動会当日の動きをおぼえよう。	◎対象児童が把握できるように、演技する場所や動きを視覚的に示す。【①-2-1】
展開	2 リズムに合わせて踊る。 (1) 全体を通して演技する。 (2) 互いの動きを見合う。	○隊形を整えながら、運動場での演技の位置が確認できるようにする。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○次時は、運動場で当日の演技の場所を確認することを伝える。

**算数 単元「かけ算（１）」〔４校時〕**

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 算数 《本時のねらい》 ・ものの集まりをいくつかずつまとめて数える活動を通して、かけ算の意味を理解することができるようにする。	《教育課程上の位置付け》 算数 《本時のねらい》 ・ものの集まりをいくつかずつまとめて数える活動を通して、かけ算の意味を理解することができるようにする。

**展 開**

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 本時のめあてをつかむ。 みのまわりにあるものから「ずつあつめ」をしよう	◎対象児童以外の児童に個別指導を行う際は、FMマイクのスイッチを切る。 <b>【①-2-1】</b>
展開	2 かけ算の考え方を調べる。 （１）１袋に数個入っているものを見つける。 （２）見つけたものを全体で交流し、かけ算の考え方を調べる。	○「～ずつ」の考え方が理解できるように、卵のパック等見せて説明する。 ○見つけたものを発表させ、２ずつ、３ずつ等と整理しながら板書する。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○分かったことや友達とがんばったこと等を書くようにする。

体育では、対象児童が自信をもち、ほとんど教師を頼らずに活動することができていました。ダンスの動きが居住地校児童と揃い、隊形の変化にも対応することができています。今回はFMマイクを使用していたため、指示に対する受け答えもできました。学習後の感想の中で、居住地校児童から「(対象児童が)アンカーとして頑張ってくれたので一番になれた」等の声が聞かれ、対象児童にとって自信になったと思われます。

算数では、細かな打合せが十分にできていなかったため、対象児童が「～ずつ」という用語に戸惑う様子が見られました。在籍校担任と居住地校担当者は、教科学習では、対象児童が、学習の進度や見通し、使用する用語を事前に把握できるようにしておくことを確認しました。

2回目の交流が終了した週の土曜日に運動会が実施されました。運動会当日は在籍校の休業日でしたが、改めて在籍校の校長と居住地校の校長が対象児童

の参加について協議し、保護者が付き添い運動会に参加することにしました。

運動会当日は、学年の全ての演技に対象児童が参加し、居住地校児童と達成感や満足感を共有することができました。運動会を通して居住地校交流に取り組んでいることが、開会式での校長あいさつでも紹介され、全校の保護者や地域の方に広く周知する機会となりました。



運動会での演技の様子

11月（3回目）

生活 題材「おもちゃランドをひらこう」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 生活 《本時のねらい》 ・身近にあるものを使って作ったおもちゃで遊んだり、ものの特徴を生かして工夫する面白さを実感したりすることができる。	《教育課程上の位置付け》 生活 《本時のねらい》 ・相手にゲームの面白さや遊び方を分かりやすく教え、みんなで遊ぶ楽しさに気付くことができる。

在籍校担任と居住地校担当者は、事前に、居住地校児童が自分たちの考えた遊びを用意し、遊び方を説明できるようにしておくことを確認しています。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 本時のめあてをつかむ。 ともだちをしょうたいして、おもちゃランドをひらこう	○1年生や対象児童が、4つの遊びのコーナーを繰り返し回ることができるよう場を設定する。
展開	2 遊び方を説明したり、説明を聞いて遊んだりする。 (1) 役割に即して活動する。 (2) 感想を話し合う。	◎対象児童が友達とのやりとりができていない時は、在籍校担任が適宜、通訳をする。 【①-2-1】
まとめ	3 おもちゃランドでの体験を振り返り、日記にまとめる。	○居住地校児童には1年生や対象児童との関わりを通じた気付きを書かせる。

対象児童にとって、同じ学級での3回目の交流となり、教室の雰囲気になじんでいる様子でした。対象児童は、4つの遊びのコーナーを繰り返し回る活動設定であったため、活動の見通しをもつことができ、自分から積極的に友達の中に入ることができていました。遊びコーナーを回って楽しみながら、「空気砲はうるさくてびっくりした」、「くじで当たりを出したのですごく楽しかった」、「体育館でも教室でもすごかったです」等と感想を書いており、広い場で活動する体験に感動していた様子でした。



魚釣り遊びコーナーの様子

この日、対象児童はFM補聴器を忘れていたのですが、友達とのやりとりで分からない時は支援員を見るように伝えていたので、適宜、通訳の支援を受けることができています。また、居住地校児童の説明も分かりやすく、対象児童は活動内容を理解することができていました。

まとめの段階では、居住地校児童から次々にそれぞれの感想が発表された他、在籍校担任が対象児童の感想を披露することにより、より一層交流の意義が深まったようでした。

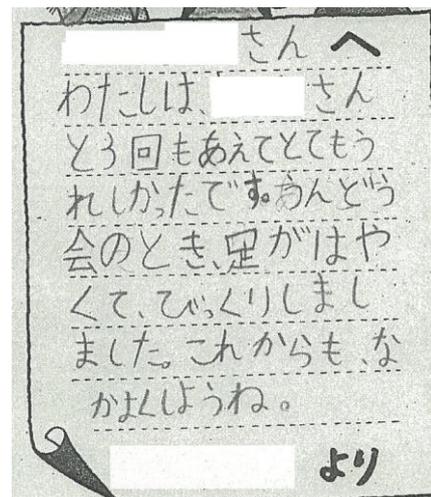
### 居住地校交流の実施を通して

昨年度は、児童相互のコミュニケーションの難しさもあったようですが、FM補聴器や補助手段の活用等により、対象児童にとって必要な情報が確保できるように配慮したこと、また、居住地校児童への事前学習により、居住地校児童のコミュニケーション手段に関する理解が進んだことから、児童相互の円滑なコミュニケーションが図れるようになりました。

本年度の3回の実施が終了した後、事後学習として、居住地校児童が対象児童へ手紙を書いています。内容を見ると、多くの居住地校児童が対象児童の良さに着目し、今後も互いのつながりを大切にしたいとの思いをもっていることが分かり、年間目標として目指している姿が現れてきているものと考えます。

地域では、対象児童が行事に参加している際に、居住地校児童が対象児童に声をかける等、児童相互の関わりも増えています。

保護者や在籍校担任も、居住地校交流を通して、対象児童が積極的に学校や地域での活動に取り組むようになったことを喜んでいきます。



事後学習で居住地校児童が書いた対象児童への手紙

### (3) [知的障害] 小学部（重複学級）3年生児童

対象児童は、特別支援学校（知的障害）の重複学級に在籍する肢体不自由を併せ有する3年生です。簡単な日常会話は理解しており、身近な言葉を用いて1～2語文程度で発語することができます。移動の際は車椅子を使用し、食事や排泄の場面で一部介助を必要としています。

対象児童の居住地校は、全校児童数441名の学校です。交流する3年生の学級は37名の学級です。

#### 昨年度までの状況

対象児童は、昨年度、次のような年間目標を設定し、学級活動・音楽・生活の各教科等において1時間ずつ居住地校交流を実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・楽しい雰囲気の中で共に活動することにより、居住する校区の友達や地域社会の人々との結びつきを深める。	《年間目標》 ・障害について理解を深めるとともに、相互のふれあいを通じ、自分にできることを考えて行動する等、豊かな人間性を育む。

#### [活動計画]

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
7月	小学校 会議室	(在籍校) 生活単元学習 (居住地校) 学級活動	学習の様子を紹介し合ったり、ゲームをしたりする。
9月	小学校 会議室	(在籍校) 音楽 (居住地校) 音楽	歌遊びや合唱をしたり、楽器を演奏したりする。
11月	小学校 会議室	(在籍校) 生活単元学習 (居住地校) 生活	手作りおもちゃを作り、ルールを守って遊ぶ。

年3回の居住地校交流における対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○在籍校での学習を生かして自信をもって学習に参加し、友達と関わり合うことの楽しさを十分に味わうことができていた。	○対象児童と同じグループの児童は適切に声かけができていた。交流を通して、思いやりの心情が深まる様子がみられた。

居住地校担任も十分に教材研究を深めていたことから、効果的な実施ができており、対象児童の保護者からも感謝の声が寄せられました。在籍校担任、居住地校担当者は、今後に向けて、対象児童の活動量や時間を検討すること、居住地校の年間指導計画への位置付けを明確にしておくことを確認しました。

## 本年度の年間目標

本年度も、居住地校交流を継続することになり、在籍校担任、居住地校担当者は、これまでの実施状況や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・社会的な経験を広め、より望ましい社会性を身に付ける。 ・校区の友達や地域社会の人々との結びつきを深める。	《年間目標》 ・校区に住んでいる異なる学校へ通う友達の存在を知り、地域生活の中で意識して関わろうとする心情を育てることができる。

昨年度から居住地校交流を継続していますが、居住地校では進級に伴う学級編成が行われているため、再度、居住地校児童が対象児童のことを知るための活動を設定することから始め、本年度は、学級活動や体育の学習において居住地校交流を実施することとしました。

在籍校担任と居住地校担当者は、対象児童が疲れな程度に活動を設定すること、居住地校では特別支援教育コーディネーターと教務主任が連携して実施をサポートすること、学級通信等で保護者への理解啓発を図ること、実施後に居住地校児童から対象児童へ手紙や感想を書くこと等を確認しました。

## 居住地校交流の実際

7月（1回目）

学級活動 題材「〇〇さんを知ろう集会をしよう」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 学級活動 《本時のねらい》 ・好きなことや学習していること等について自己紹介したり、ジェスチャーや発声を通して自己表現したりすることができる。	《教育課程上の位置付け》 学級活動 《本時のねらい》 ・対象児童を知る活動を通して、同じ学年の友達が特別支援学校で頑張っていることを知り、これからの交流に期待を持つことができるようにする。

指導に当たり、在籍校担任と居住地校担当者は、対象児童は体温調節が難しいため、空調設備のある部屋を使用すること、居住地校での事後学習で児童の感想を交流し、互いの感じ方の違いに気付かせること等を確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 居住地校児童が自己紹介し、めあてを確認する。 ○○さんを知ろう集会をしよう	○居住地校児童が進行し、集会活動に対象児童を招待する形で進める。
展開	2 集会を行う。 (1) 対象児童、保護者、在籍校担任からの話を聞く。  (2) 交流をする。 ・クイズ、ダンス等	○対象児童が学校で頑張っていること、小さい頃の様子等を紹介してもらう。 ◎対象児童による自己紹介では、ジェスチャー等を交えて発表するよう支援する。 <b>【①-2-1】</b> ○居住地校生徒は、対象児童の表現内容をジェスチャー等も含めて、汲み取るよう伝えておく。 ○在籍校の運動会のダンスを居住地校児童も教えてもらい、一緒に踊る。 
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○対象児童との出会いから考えたことや感じたことを発表させる。

対象児童は、自己紹介を通し、ジェスチャーや在籍校担任が提示するコミュニケーションボードを用いて在籍校や家庭生活の様子等を伝え、自分の思いを伝える意欲を高めていく様子が見られました。自己紹介の時間が足りなくなったため、在籍校担任は、今後は、伝える内容を事前に吟味し、できるだけ対象児童が主体的に表現できる方法を工夫することにしました。

居住地校児童は、対象児童の保護者が、対象児童のこれまでの成長について話す場面で、うなずきながら真剣に話を聞いていました。その後も、対象児童が在籍校で頑張っていること等を知るクイズや、在籍校の運動会で対象児童が踊ったダンスを一緒に踊る等の活動を通し、居住地校児童は、対象児童のことをもっと知りたいと気持ちを高めていました。本時の振り返りでも、居住地校児童から対象児童について知った新たな気づきがたくさん発表され、今後の交流への期待を高めていました。

活動は空調設備のある部屋で実施されましたが、活動に制限があったため、児童相互の活発な交流ができませんでした。そこで、在籍校担任と居住地校担当者は、今後の交流は体育館等の広い場所で行うことにしました。

10月（2回目）

体育 単元「跳び箱・マット運動」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 遊びの指導 《本時のねらい》 ・言葉やジェスチャーを使って友達と関わりながら、マットやエアートランポリン等を使って、いろいろな動きに取り組むことができる。	《教育課程上の位置付け》 体育 《本時のねらい》 ・マット、跳び箱、平均台等の器械・器具を使って、回転、バランス、跳び越し等、自己の体をいろいろ動かして各種の動きに取り組む楽しさを味わうことができる。

今回の交流は、居住地校の体育の学習で実施されますが、対象児童の在籍校の教育課程上の位置付けは、遊びの指導として実施しています。

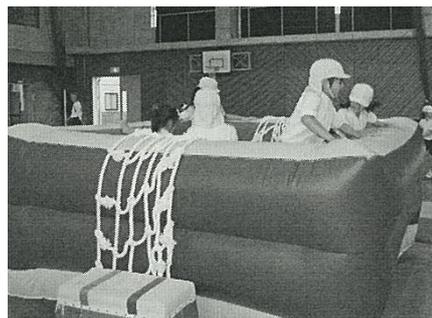
前回の交流を踏まえ、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校での事前学習の際に、在籍校担任から、対象児童が在籍校で頑張っている内容を居住地校児童に伝えておくこと、指導に当たっては、体育館にサーキット運動の場を設定し、コースの途中に居住地校児童が対象児童と必ず関わることができる場所を決めておくこと、事後学習では、感想や手紙を基にした交流を行うこと等を確認しています。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 準備運動を行い、めあてを確認する。 跳んだり回ったり、バランスをとったりして楽しく体を動かそう。	○対象児童と一緒に運動する際に配慮することを確認する。
展開	2 サーキット運動をする。 	○6グループで回り、一つの場所での運動を4分間とする。 ◎対象児童はエアートランポリンで運動するようにする。【①-1-2】
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○一緒に運動することを通して感じた感想を発表させる。

対象児童は、居住地校児童の動きを見ながら自分もやってみようと意欲を高め、マットを這って体を移動する運動や、エアートランポリンで跳ぶ運動に進んで取り組みました。マットを這って体を移動する運動では、回数を重ねる度に移動が速くなっています。

グループ毎に対象児童のいるエアートランポリンで活動するようにした場の設定は、居住地校児童が、動きを通して対象児童との関わりを深めていく上で効果的でした。揺れる箱形の空間の中で、体をくっつけたり、支え合ったりすることを通して、互いに親近感を深める様子が窺えました。指導には、市の体力向上推進教員も入り、安全面や技術の向上についても配慮された学習になりました。



エアートランポリンでの活動を通して関わりを深める様子

今回は、対象児童と居住地校児童全員とがふれあう機会を設定しましたが、対象児童への負担が懸念されるため、在籍校担任と居住地校担当者は、今後、できるだけ負担を減らすことも念頭に置くことにしました。

**12月（3回目）**

**学級活動 題材「〇〇さんと給食交流をしよう」**

対象児童	居住地校児童
<p>《教育課程上の位置付け》 生活単元学習、日常生活の指導 《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>居住地校の友達の前で、在籍校の学習発表会ステージ発表で行った鍵盤ハーモニカの演奏を披露することができる。</li> <li>居住地校の友達と一緒に給食を食べることができる。</li> <li>3年生で交流した感想と4年生への期待を身振りや発語によって知らせようとするすることができる。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》 学級活動 《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>歌やリコーダーの演奏を通して自分たちの頑張っていることを紹介する。</li> <li>食事のマナーを守り、対象児童と仲良く交流しながら楽しく食事をするすることができる。</li> <li>対象児童の表現意図を表情や言葉等から聞き取ったり想像したりしながら聞くことができる。</li> </ul>

今回は、本年度最後の交流となるため、在籍校担任と居住地校担当者は、3回の交流のまとめの会、給食、休み時間の一連の活動を交流として位置付けることにしました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 在籍校担任の話を聞く。 発表会での頑張りを紹介し合い、みんなで給食を食べよう。	○居住地校児童に、対象児童の在籍校での学習の様子や成長等を知らせる。
展開	2 居住地校の文化発表会での取組、在籍校の学習発表会での取組を紹介し合う。  3 給食交流をする。	○居住地校児童に、発表内容（鍵盤ハーモニカの演奏）の紹介を通して対象児童の頑張りを発見できるように伝えておく。 ◎対象児童の話から聞き取ったことを居住地校児童が発表し、在籍校担任から話の内容を改めて伝えるようにする。 <b>【①-2-1】</b> ○交流を広げるため、対象児童から居住地校児童が箸を受け取るようにする。
まとめ	4 本時の振り返りをする。	○居住地校児童から対象児童へ質問したり、感想を述べ合ったりさせる。

居住地校児童は、今回の交流を楽しみにしており、活動後も、これからも交流をしたいという声が居住地校児童から多く聞かれました。

互いの学校の発表会で取り組んだ器楽演奏を披露し合ったことで、居住地校児童は、対象児童がとても上手に鍵盤ハーモニカを演奏する姿に感心し、対象児童も自分たちと同じように在籍校での発表会に向けて頑張っていたことを感じていたようです。

対象児童は、在籍校の学習発表会の取組を紹介する中で、事前に在籍校担任と話し合っただけで考えたメッセージを居住地校児童に伝えていきます。発声できる言葉を自分で選び、大きなジェスチャーを交えながら、「きょうで（本年度の交流が）おわります。ぼくは、みんな（が）すきです。ありがとうございました。ぼくは、がんばります。みんな、がんばってください。」と自分の思いを伝えました。学習を参観していた保護者は、これほど長い文章での話を聞いたのは初めてと驚いていました。

対象児童のメッセージについては、聞き取った内容を居住地校児童に発表させる時間を設け、在籍校担任から改めて内容を伝えるようにしていましたが、居住地校児童はしっかりと対象児童の言葉を聞き取ることができていました。

給食交流では、給食を準備する際、対象児童が居住地校児童に箸を配る係を担当し、「はい、どうぞ」と箸を渡す対象児童に、居住地校児童がそれぞれに「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えています。ある居住地校児童は、対象児童と一緒に給食を食べる中で、苦手な食べ物が一緒であることに気付き、「自分と同じだ。」と言って互いに笑い合っていました。



給食準備の際、居住地校児童が対象児童から箸を受け取る様子

食事をする場面では、対象児童と居住地校児童の食べる速さが違うことが課題になりました。対象児童が慌ただしく食べることにならないよう、居住地校児童からの質問に答える時間は別に設定する等の配慮が必要です。

休み時間は、対象児童と居住地校児童の自由な関わりの中で、遊びが工夫されていく様子が見られ、対象児童もとても満足した様子でした。

居住地校からは、次年度も給食を含んだ交流を行いたいとの要望が出されています。在籍校担任と居住地校担当者は、次年度の実施に向けて、対象児童への負担を考慮しながら内容や方法を検討することにしました。

### 居住地校交流の実施を通して

この一年間で対象児童は語彙が豊富になり、自分の思いや考えをしっかりと持てるようになり、コミュニケーションの力も伸びていますが、本年度の交流を通し、居住地校児童もこのような対象児童の成長を感じ取ることができるようになっています。

居住地校では、これまでの2年間の交流から、通っている学校は異なっても対象児童は同じ学級の仲間であること、それぞれの学校で各自が精一杯普段の学習に取り組む、次回の交流の際に、対象児童と互いの成長を確かめ合おうとする意識が育ってきています。

在籍校担任と居住地校担当者の打合せの時間がとりにくいことが課題となっていますが、今後の交流を更に充実させていくために、打合せの方法を工夫することにしました。

地域では、対象児童が保護者と出かけた際に、居住地校児童から対象児童に声をかけてくることが多くなった他、放課後や休日は、対象児童の自宅を居住地校児童が頻繁に尋ねてくるようになりました。居住地校児童が自分の兄弟を連れてくることもあり、地域での対象児童の友達関係が広がっているようです。

この前は交流会に来てくれてありがとう。  
 さんがえがおでわらってくれたりハイタッチしてくれたり、さんと、いっぱい交流できて楽しかったです。とくに、さんのマツキょううは、さんがとても早かったのも、びっくりしました。  
 さんの言葉クイズでは、とても分かりやすかったのです。いな。と、思いました。新かんせんやラーメンは、とてもほづ音がよくは、きりと聞こえました。こんどの交流会では、いしはにきょうしくを食べてみるために、楽しみに待っています。また遊びに来てね。

事後学習で居住地校児童が書いた対象児童への手紙

#### (4) [知的障害] 小学部（一般学級）5年生児童

対象児童は、特別支援学校（知的障害）の一般学級に在籍する自閉症を併せ有する小学部5年生です。集団から離れて一人遊びをすることが多く、自分のペースを乱されたり、強く指示されたりすると不安定になることがあります。

対象児童の居住地校は、全校児童数170名の小学校です。5年生の学級は2学級あります。

#### 昨年度までの状況

対象児童は、4年生であった昨年度、次のような年間目標を設定し、音楽・体育・図画工作の各教科において1時間ずつ居住地校交流を実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・交流を重ねる中で、大きな集団に慣れ、持続的に活動することができるようにする。	《年間目標》 ・交流を通して、障害に対する理解を深め、思いやりの心を育てることができる。

#### [活動計画]

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
10月	小学校 体育館	(在籍校) 音楽 (居住地校) 音楽	曲に合ったリズムを太鼓やカスタネット で演奏する。
11月	小学校 体育館	(在籍校) 体育 (居住地校) 体育	体ほぐしの運動や多様な動きをつくる 運動をする。
2月	小学校 体育館	(在籍校) 生活単元学習 (居住地校) 図画工作	ステンシルを使ったカードを制作する。

年3回の居住地校交流における対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○交流を重ねる度に友達の声掛けを受け入れたり、友達と一緒に活動したりする時間が増えてきた。  グループで表現を工夫する様子	○対象児童に自然に手を貸したり声をかけたりする等、関わり方に深まりがみられた。  対象児童のために作成したゲームの補助具を使う様子

在籍校担任、居住地校担当者は、今後の実施に向けて、教科のねらいを達成しつつ、対象児童との関わりを深めることができる学習活動を今後も検討し、交流する場をを広げていくことを確認しました。

## 本年度の年間目標

本年度も、居住地校交流を継続することになり、在籍校担任、居住地校担当者は、これまでの実施状況や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・多くの友達とふれあい、集団活動に慣れ親しむことができる。 ・人に興味をもち、自分から人と関わろうとする場面を増やすことができる。	《年間目標》 ・障害のある子ども達との交流を通して、同じ社会に生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくための資質を育てる。

年間目標を基に、本年度は、音楽・体育・特別活動の教科等において1時間ずつの居住地校交流を実施することとしました。在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校で事前に校内研修会を行い、本年度の居住地校交流実施について教職員の共通理解を図ること、居住地校児童の対象児童への関わり方に関する事前学習を学級活動の時間に行うことを確認しました。

## 居住地校交流の実際

7月（1回目）

### 音楽 単元「インターロッキングの音楽にチャレンジ」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 音楽 《本時のねらい》 ・リズムをもとに、2拍子のリズム打ちができるようになる。 ・居住地校児童と一緒に楽器を演奏することができる。	《教育課程上の位置付け》 音楽 《本時のねらい》 ・友達同士で話し合ってリズムを生かした音楽を創り、協力して演奏することで、互いの距離を縮め、共に助け合い、支え合っていこうとする力を育てる。

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校での事前学習で、対象児童への声のかけ方、タイミングを居住地校児童に知らせておくこと、指導や支援の際に以下の配慮をすること等を確認しました。

- ・学習場所は、必要なスペースだけを仕切り、活動範囲を限定しておく。
- ・対象児童が好きな簡単なリズムを伝える活動を取り入れる。
- ・掲示物に写真を入れ活動の見通しがもてるようにする。
- ・在籍校担任が対象児童への関わり方を居住地校児童に助言する。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	<p>1 仲間意識を高めるとともに、めあてと活動の流れの確認をする。</p> <p>オリジナルの「レッツゴーパーティー」を作って演奏会をしよう</p>	<p>◎仲間意識を高める活動として、隣の人の手のひらにタッチするリズム打ちを取り入れる。</p> <p>◎活動の流れを写真入りで掲示する。</p> <p>【①-1-1】</p>
展開	<p>2 基本のリズムを生かして楽譜を作り、演奏する。</p> <p>(1) 簡易楽譜を作成し、演奏するリズムと場所を決める。</p> <p>(2) 自分の決めた楽器で練習する。</p> <p>(3) グループで発表する。</p> 	<p>◎リズムカードを選択させることも認めるようにする。【①-1-2】</p> <p>◎簡単なリズムを多く入れてもよいことを確認する。</p> <p>◎対象児童にとって楽器演奏が難しい場合、2人組で演奏する方法等を提示する。</p> <p>【①-1-2】</p>
まとめ	<p>3 本時の振り返りをする。</p>	<p>◎仲間と活動したこと、リズムや音色等について感じたことを振りかえらせる。</p> <p>◎次回交流する際の個人のめあてについても確認する。</p>

対象児童は、集団を離れる場面があったものの、構造化された場の配置が効果的に働き、友達の呼び掛けを拒否することなく集団に戻ることができました。活動の始まりと終わりに手拍子の合図を取り入れたこと、体温調節のために体を冷やす道具を用意しておいたことも有効であったようです。活動の内容が明確でない場合、対象児童は活動の見通しがもてなくなるため、次回実施の際は、絵カードを使って活動内容を明確に伝えることにしました。

居住地校児童には、昨年度よりも自然で主体的な関わり方が多く見られました。本時では、対象児童と関わる居住地校児童の範囲が限られていたので、できるだけ多くの居住地校児童が関わることを工夫する必要があります。

音楽の単元においては、友達と一緒に楽しんでも行う活動が多くできる授業場面を選択することが効果的であると思われます。



二人組でリズム打ちをする様子

9月（2回目）

体育 単元「風船バレー」

対象児童	居住地校児童
<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>体育</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんの児童とかかわって、一緒に風船バレーを楽しむことができる。</li> <li>・自分の近くにきた風船を相手に打ち返すことができる。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>体育</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・風船バレーのルールを守ってゲームをし、相手の気持ちを考えた言葉で声をかけたり応援したりすることで、ともに助け合い、支え合っていこうとする力を育てる。</li> </ul>

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校児童には、対象児童が離席した場合、席に着くことを促すための絵カードを使う方法と話しておくこと、風船バレーの際は、対象児童がいろいろなチームに入ること、できるだけ多くの居住地校児童が対象児童と関わるようにすること等を確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	<p>1 めあてを確認する。</p> <p>ふわふわ言葉をたくさん言い合いながら風船バレーを楽しもう</p>	<p>◎対象児童を居住地校児童がハイタッチで迎えるようにする。</p> <p>◎写真入りの掲示により、授業の流れやルールを視覚的に理解できるようにする。</p> <p>【①-1-1】</p>
展開	<p>2 風船バレーをする。</p> <p>(1) 4人組で風船をついて遊ぶ。</p>  <p>(2) 9対9の対戦ゲームをする。</p>	<p>◎隣のチームとの間隔を十分にとる。</p> <p>◎運動技能の差にかかわらず、風船に触れることができるよう椅子に座った状態での活動も取り入れる。【①-1-2】</p> <p>◎対象児童がいろいろなチームに入り、多くの児童が関わるようにする。</p>

まとめ	3 本時の振り返りをする。	○ルールを守って楽しく活動できたかについて振り返る。	
-----	---------------	----------------------------	---

対象児童は、交流を重ねる度に落ち着いて集団に参加するようになり、居住地校児童の働き掛けがあれば早く行動を切り替えることができるようになってきました。手立てとして、活動場所を離れた際に提示される写真カード(着席している様子)の他、風船バレーを椅子に座って行う形態が効果的でした。



写真カードを使っている様子

居住地校児童は、本時のねらいと活動内容が分かりやすく提示されていたので、声かけをしたり行動を促す写真カードを使ったりしながら対象児童と一生懸命に関わろうとする姿がみられました。多くの児童が対象児童と関わることができるように活動やチーム編成を工夫したことが有効であったようです。

今回の交流では、指導案に役割分担を明記したことで、双方の担任がスムーズに連携することができました。

11月(3回目)

学級活動 題材「ふれあい祭を開こう」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 学級活動 《本時のねらい》 ・お祭りへの参加を通して、たくさんの児童と関わることができる。 ・自分のやりたい活動を選び、相手の働き掛けに応じることができる。	《教育課程上の位置付け》 学級活動 《本時のねらい》 ・協力してお祭りの準備をしたり、相手が心地よくなるような言葉掛けをしたりすることができる。

これまでの交流を踏まえ、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校児童に事前にめあてを確認させておくこと、対象児童には個別のめあてを確認することを確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	<p>1 めあてを確認する。</p> <p>相手が心地よくなるような言葉掛けをしよう</p> <p>(対象児童の個別のめあて)</p> <p>ルールを守ってお祭りを楽しもう</p>	<p>○対象児童を居住地校児童がハイタッチで迎えるようにする。</p> <p>◎写真入りの掲示により、授業の流れやルールを視覚的に理解できるようにする。</p> <p>【①-1-1】</p>
展開	<p>2 交替でお祭りの店を開く。</p> <p>①的当て</p> <p>②ボウリング</p> <p>③輪投げ</p> <p>④人間キャタピラー</p> <p>⑤ブラックボックス</p>	<p>○店の前に順番に並べるように、目印のラインを貼っておく。</p> <p>◎⑤は、対象児童がヒントカードを手がかりにして問題に答えられるようにする。</p> <p>【①-1-2】</p> 
まとめ	<p>3 本時の振り返りをする。</p>	<p>○どんな言葉掛けができたか、どのように友達と関わったかについて振り返る。</p>

対象児童は、お祭りの店で多様なゲームに意欲的に参加しており、居住地校児童が出した手に自分の手を重ねたり、握手をしたりする等、居住地校児童と一緒に活動しようとする姿が多く見られました。これまでと比べ、集団を離れる場面が減り、少ない支援で友達と関わることができるようになっていきます。お祭りの店でのゲームが、対象児童の日頃の学習活動を生かすことができる内容であったことが有効であったようです。



対象児童が輪投げをしている様子

居住地校児童は、「相手が心地よくなる言葉をたくさん使おう」、「対象児童に自分から関わろう」というめあてを明確にもっていたため、居住地校児童同士や対象児童と活発に関わり合っていました。居住地校担当者が、活動の途中、児童のよい発言や工夫を取り上げて全体に広める等の指導を行ったことも効果的だったようです。

居住地校児童は、対象児童に応じたゲームのルールを決めていたのですが、

対象児童にルールが合っていないことが分かったと、その場でルールを変更し、対象児童がゲームの目的を達成すると一緒に喜ぶ姿が見られ、これまでの交流の深まりが感じられました。

本時の振り返りでは、居住地校児童から、「前はあまり関わりがもてなかったけれど、今日は相手が心地よくなる言葉を使って、一緒に行動できた。」「(対象児童に) どこかで合ったら声をかけたい。」等の感想が発表され、ほとんどの居住地校児童が自分のめあてが達成できたことを実感していました。

本年度の居住地校交流は今回が最後ですが、在籍校担任、居住地校担当者は、今後に向けて、事前準備にかかる時間を少なくすることや、双方の児童が互いに楽しむことができる活動の工夫について検討することにしています。

### 居住地校交流の実施を通して

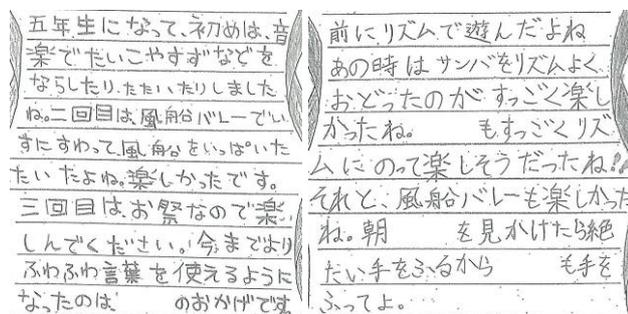
本年度の3回目の交流では、居住地校児童の対象児童への関わり方が特に自然であり、互いに同じ校区に住む児童であるという意識が芽生えている様子が窺えました。

事後学習として、居住地校児童が対象児童へ書いた手紙には、対象児童のおかげで相手が心地よくなる言葉を使えるようになったことや、地域で見かけたら手を振って欲しいこと等を伝える内容が見られることから、互いの児童に年間目標としてめざす資質を育てる上で、全3回の交流がとても良い機会になったようです。

交流を参観していた対象児童の保護者は、互いの児童がめあてを明確にもつことで、居住地校児童の対象児童への関わり方が変わってきたこと、対象児童が落ち着いて行動できるようになってきていることを実感していました。

居住地校交流の取組が行われるようになってから、休日に家族で図書館に出かけた対象児童が、居住地校児童から声をかけられる等、地域で声をかけられる機会が増えているようです。

居住地校では、居住地校交流の実施の様子を、学校通信や学級通信等で居住地校の保護者に知らせており、今後、居住地校交流の取組に対する地域の理解が進んでいくことが期待されます。



事後学習で居住地校児童が書いた対象児童への手紙

93/19(1)	1学期の振り返り
93/19(2)	2学期のスタート
93/19(3)	3学期のスタート
93/19(4)	4学期のスタート
93/19(5)	5学期のスタート
93/19(6)	6学期のスタート
93/19(7)	7学期のスタート
93/19(8)	8学期のスタート
93/19(9)	9学期のスタート
93/19(10)	10学期のスタート
93/19(11)	11学期のスタート
93/19(12)	12学期のスタート
93/19(13)	13学期のスタート
93/19(14)	14学期のスタート
93/19(15)	15学期のスタート
93/19(16)	16学期のスタート
93/19(17)	17学期のスタート
93/19(18)	18学期のスタート
93/19(19)	19学期のスタート
93/19(20)	20学期のスタート
93/19(21)	21学期のスタート
93/19(22)	22学期のスタート
93/19(23)	23学期のスタート
93/19(24)	24学期のスタート
93/19(25)	25学期のスタート
93/19(26)	26学期のスタート
93/19(27)	27学期のスタート
93/19(28)	28学期のスタート
93/19(29)	29学期のスタート
93/19(30)	30学期のスタート

居住地校交流の取組を伝える学校通信及び学級通信

## (5) [知的障害] 小学部（重複学級）6年生児童

対象児童は、特別支援学校（知的障害）の重複学級に在籍する肢体不自由を併せ有する6年生です。周囲の状況を見たり聞いたりすることはできますが、相手とのコミュニケーションを図ることは困難な状況が見られます。日常生活や学習場面での支援を必要としています。

対象児童の居住地校は、全校児童数331名の学校です。交流する6年生の児童数は52名です。

### 昨年度までの状況

対象児童は、5年生であった昨年度、次のような年間目標を設定し、国語・外国語活動・総合的な学習の時間の各教科等において1時間ずつ居住地校交流を実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・生活経験を広げるとともに、コミュニケーション能力や社会性を養う。	《年間目標》 ・交流及び共同学習を通して、いろいろな人と関わったり、生活経験を広げたりして、自主性、社会性を養う。

### [活動計画]

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
7月	教室	(在籍校) 国語 (居住地校) 国語	物語を群読する。
9月	教室	(在籍校) 生活単元学習 (居住地校) 外国語活動	外国の行事やゲーム、歌等を体験する。
2月	音楽室	(在籍校) 音楽 (居住地校) 総合的な学習の時間	学習発表会で発表した楽曲を合奏をする。

年3回の居住地校交流における対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○多人数の集団に参加して活動することに慣れることができた。	○対象児童への関わり方が自然であり、反応を待つことができていた。

在籍校担任、居住地校担当者は、今後の実施に向けて、対象児童が更に自発的に関わることができる時間を確保すること、より多様な学習内容や学習形態を経験させることについて確認しました。

## 本年度の年間目標

保護者は、地域とのつながりを大切に考え、対象児童と一緒に地域の行事に積極的に参加しており、居住地校交流では、居住地校の通常の学級での授業に参加し、在籍校では経験できない学習をさせること、同学年の居住地校児童とふれあい、互いに理解し合える関係を作りたいことを希望しています。

昨年度の取組を通し、地域で買い物をしている対象児童を見かけた居住地校児童が声をかける姿が見られ、保護者も喜んでいました。

本年度も居住地校交流が継続されることになり、在籍校担任、居住地校担当者は、これまでの実施状況や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
<p>《年間目標》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>居住地校の学級や集団の雰囲気に慣れ、友達と一緒に活動することができる。</li> </ul>	<p>《年間目標》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>交流を通して障害に対する理解を深め、互いにコミュニケーションを図り、生活に役立つ技能や知識を身に付けることができる。</li> </ul>

年間目標を基に、本年度は、家庭・理科・国語等の各教科において居住地校交流を実施することとしました。実施に当たっては、交流そのものに焦点を当てた学習を新たに設定するのではなく、できるだけ居住地校の教育課程に即した学習に参加させることにしました。学習形態としては、一斉学習だけでなく班学習も取り入れ、休み時間の交流も含めることにしました。

在籍校担任と居住地校担当者は、配慮を要する事項として、移動時や活動時には転倒しないように気を付けること、居住地校児童には、対象児童について事前に伝え、関わり方を考えさせておくこと等を確認しました。

## 居住地校交流の実際

7月（1回目）

家庭 題材「食事と生活のリズムを見直そう」

対象児童	居住地校児童
<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>生活単元学習</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>調理実習を通して生活経験を広げる。</li> <li>友達と身体的接触や言葉を介したコミュニケーションを図る。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>家庭</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ジャガイモの調理実習を通して、対象児童とふれあいながら安全に気を付けて活動することができる。</li> </ul>

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、交流する時間までに、調理の準備段階までは居住地校児童にさせておくこと、学習の振り返りでは、対象児童の様子を含めた気づきを発表させること等を確認しました。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 調理の準備をし、めあてを確認する。 楽しく安全にジャガイモもちを作ろう	◎対象児童にも配慮しながら、安全に活動できるような場や道具の準備をさせる。
展開	2 手順を確認し、調理をする。 (1) 各班で手順を確認する。 (2) 調理をする。 (3) 後片付けをし、会食の準備をする。 (4) 会食をする。	◎対象児童は、調理の「まるめる」・「焼く」部分の活動を行うことを確認させる。 【①-1-2】 ◎最初に居住地校児童が調理し、対象児童が行う際の手がかりとなるようにする。 【①-2-1】 ◎双方の児童に、互いに声掛けをしながら活動することを意識させる。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	◎双方の児童と一緒に活動する中で気付いたことを中心に発表させる。

居住地校児童は、対象児童の意思表示を待ったり、対象児童に言葉をかけたりしながら積極的に関わっていました。在籍校担任も、対象児童のつぶやきを基に、対象児童の気持ちを言語化して居住地校児童に伝えるようにすることで、居住地校児童は対象児童に共感しながら活動を進めていました。在籍校担任は、児童の相互理解を深めるために、対象児童の気持ちを言語化する支援を今後も継続することにしました。



みんなで会食をする様子

対象児童は、在籍校では経験したことがない調理の活動を体験することができた他、周囲の児童のつぶやき等を聞いて、「いいにおい。」等、明瞭に発語する様子が見られました。また、学習後に参加した給食準備では、在籍校で取り組んでいる学習を生かしてストローを配ることができています。

交流後、対象児童は作った「ジャガイモもち」を在籍校で紹介しています。

9月（2回目）

理科 題材「水よう液の性質」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 生活単元学習 《本時のねらい》 ・理科実験（水溶液）を通して生活経験を広げる。 ・友達と身体接触や言葉を介したコミュニケーションを行う。	《教育課程上の位置付け》 理科 《本時のねらい》 ・障害のある児童との共同作業を通して関わり方についての理解を深める。 ・一緒に実験したり遊んだりする中で親しみの気持ちを育てる。

前回に続き、対象児童が参加しやすく、在籍校では経験することが少ない理科での実験を理科室で実施するようにしました。今回の学習は、中学校教員が全体の指導を行うことになっています。

在籍校担任と居住地校担当者は、実験の準備と全体指導は中学校の教員が行い、在籍校担任は各班の支援に当たること、居住地校児童には対象児童の現在の様子や配慮する点を知らせておくことを確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 実験手順について説明を聞く。 楽しく安全に水よう液実験をしよう	○対象児童にも配慮しながら、安全に活動できるような場や器具の準備をさせる。
展開	2 実験を行い、色の変化を観察する。 （1）各班で手順を確認する。 （2）実験する。 ・ムラサキキャベツを煮出す。 ・6つの水溶液にキャベツ汁を入れ、色の変化を見る。 （3）結果を発表する。	◎対象児童が観察しやすいように、試験管の位置を調整する。【①-2-1】 ○双方の児童に、互いに声掛けをしながら活動することを意識させる。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○双方の児童と一緒に活動する中で気付いたことを中心に発表させる。

全ての児童の興味・関心を引きながら授業が展開され、周囲の居住地校児童が意欲的に学習に臨んでいる様子を見て、対象児童も学習に集中する様子が見られました。対象児童は、これまでに扱ったことがない実験器具を使ったり、水溶液の色の変化を観察したりすることができた他、「きいろ」、「あお」等、観察した色の名称を明瞭に発語する姿も見られました。



グループでの実験の様子

居住地校児童は、対象児童が水溶液の色の変化を見やすくなるように試験管の位置を動かす等、対象児童に配慮した関わりができていた他、対象児童の活動の様子を見て、歩行による移動が速くなっていること、発語が多くなってきたこと等に気付き、その変化に驚く様子も見られました。このような姿は、居住地校の学級においても、互いに尊重しよさを認め合えるような人間関係が育まれることにつながると思われます。

2回の交流の様子から、在籍校担任と居住地校担当者は、次回は学年全体との交流を実施することにし、早めに事前の計画を立てることになりました。

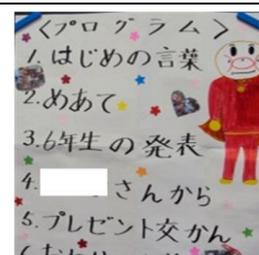
2月（3回目）

総合的な学習の時間 題材「1年間の学習をまとめよう」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》	《教育課程上の位置付け》
音楽	総合的な学習の時間
《本時のねらい》	《本時のねらい》
・集団での表現活動を通して生活経験を広げる。	・障害のある児童との表現活動を通して関わり方についての理解を深める。
・友達と身体接触や言葉を介したコミュニケーションを行う。	・一緒に合唱や合奏をしたり遊んだりする中で親しみの気持ちを育てる。

3回目は、1年間の交流のまとめとして居住地校の6学年児童全員が参加することにし、対象児童の在籍校と居住地校双方が、これまでに学習した内容を発表し合う活動を設定しました。

在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校児童の対象児童への思いを活動に反映させること、双方の児童がより主



居住地校児童が考えた活動の流れ

体的に関わり合うことができるようにすることを大切にするため、居住地校児童が1時間の活動の流れを考え、当日の準備や進行も役割を分担して行わせるようにしました。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項(◎合理的配慮及び観点)
導入	1 めあてを確認する。 互いに学習したことを発表し合おう。	◎交流のまとめの会として、居住地校児童に進行させるようにする。
展開	2 学習したことを発表する。 (1) 居住地校児童が発表する。 ・合唱・合奏 ・地域の歴史学習等 (2) 対象児童が発表する。 ・合唱 (3) 記念品交換等をする。	◎対象児童が居住地校児童の発表を参観しやすいように、対面する位置で発表させる。 【①-2-1】 ◎対象児童が慣れている在籍校担任の伴奏により合唱させる。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	◎これまでの交流を通じた感想を発表させる。

居住地校児童の合唱・合奏等は、これまでに練習を積み重ねてきたものであり、居住地校の学習発表会でも発表しています。6学年児童全員での発表は、対象児童にとっても大変迫力があるものでした。

鑑賞中、在籍校担任は、対象児童の気持ちを言語化するとともに、うなずきながら聴いたり、拍手をしたりする等のモデルを対象児童に意図的に示すようにしました。すると、対象児童も自発的にうなずいたり、拍手をしたりする様子が随所に見られるようになり、発表に集中して鑑賞を続けることができました。

対象児童が学習した楽曲は、居住地校児童にも親しみのある楽曲です。対象児童が慣れている在籍校担任の伴奏で、居住地校児童も一緒になって合唱しました。互いの発表後は、記念品交換や握手を通して、共に活動できたことに対する感謝の気持ちを伝え合うことができました。対象児童は終始リラックスした様子であり、これまで以上に笑顔が多く見られました。



居住地校児童全員での発表の様子

居住地校児童は、活動の流れを考えたり、当日の準備や進行を行ったりすることを通して、活動に主体的に取り組むことができます。記念品交換の際は、対象児童に居住地校児童全員で制作した「思い出のアルバム」が贈られた他、対象児童の保護者にも感謝状が手渡されました。



学習の中で記念品交換をする様子

また、事後の感想文には、双方の学校の様子を知ることができてうれしかったこと、一緒に学習することができて楽しかったこと、中学校に進学しても互いがんばること等が書かれており、互いの成長を認め合い、喜び合う気持ちが醸成されている様子も窺われました。

### 居住地校交流の実施を通して

本年度の交流では、家庭科の学習で交流する際、調理の準備段階までは居住地校児童にさせておくようにしていたことから、対象児童が自発的に居住地校児童に関わる時間を十分に確保することができました。また、家庭科での調理の活動の他、理科での実験等、より多様な学習内容や学習形態を経験させることもできています。

指導に当たっては、在籍校と居住地校の教師が活動内容に応じて全体指導と個別指導を交替する等、ティーム・ティーチングを取り入れた指導を行い、指導の効果を高めることができます。

対象児童は、相手とのコミュニケーションを図ることに困難さがありますが、3回の交流を通して、相手のあいさつに対してすぐに返事ができるようになっています。また、大きな音が苦手なこともあり、これまでは集団での活動を好まなかったのですが、居住地校の集団の中でも臆することなく活動ができるようになり、学習中に着席できる時間も長くなっています。

居住地校児童も、一人一人がこのような対象児童の成長を実感している様子であり、学習の場面以外でも、対象児童が階段を自分で上れたことを一緒に喜んで喜ぶ姿等が見られました。

居住地校では、3回目の交流での記念品交換の際に対象児童から居住地校児童へ贈られた色紙が校長室前に掲示されました。交流に参加していない他学年の児童が、この色紙について教師に尋ねる度に教師が説明することを重ねながら、児童全体に居住地校交流の取組への理解が広がっているところです。また、地域でも、対象児童の自宅の近くに住む児童が対象児童に声を掛ける場面が多く見られるようになっているようです。

## (6) [知的障害] 中学部（一般学級） 1 年生生徒

対象生徒は、特別支援学校（知的障害）の一般学級に在籍する中学部 1 年生です。過去に両足の手術を受けているため、自分で歩行はできるものの、階段や段差のある場所ではゆっくりと移動しており、いつでも介助ができるように配慮しておく必要があります。本年度より初めて居住地校交流を実施することになりました。

対象生徒の居住地校は、全校生徒数 331 名の中学校です。特別支援学級が 2 学級あります。

### 本年度の年間目標

保護者は、まず、居住地校の特別支援学級の生徒との交流からはじめ、対象生徒が学校に慣れてきたら、通常の学級での教科学習にも参加することを希望しています。

在籍校担任、居住地校担当者は、対象生徒の実態や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象生徒	居住地校生徒
《年間目標》 ・交流を通して、居住地校生徒とコミュニケーションを図り、互いの理解を深めていく。	《年間目標》 ・交流を通して、障害に対する理解を深め、互いにコミュニケーションを図り、生活に役立つ技能や知識を身に付けることができる。

年間目標を踏まえ、本年度の居住地校交流は、特別支援学級での生活単元学習において実施することとしました。また、交流を通じた対象生徒の状況を見ながら、音楽や学校行事における実施や、通常の学級の生徒との交流も検討していきます。

実施する時間帯は、対象生徒が、できるだけ居住地校の施設や居住地校生徒に慣れることができるよう、朝 9 時 30 分から昼食までの午前中を中心にした時間帯に設定することにしました。

在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校では、事前に実施計画を全教職員に周知して共通理解を図っておくこと、双方の生徒に当日の活動について説明しておくこと、活動に当たっては全体の指示の後、個別に支援を行いながら進めることを確認しました。また、保護者に当日の実施の様子を参観してもらうことで、対象生徒への具体的な支援の方法を必要に応じて確認することができるようになりました。

## 居住地校交流の実際

7月（1回目）

### 生活単元学習 単元「カップケーキを作ろう」

対象生徒	居住地校生徒
《教育課程上の位置付け》 生活単元学習 《本時のねらい》 ・簡単なおやつを協力して調理する活動を通してコミュニケーションを図り、互いのことを知ることができる。 ・小学校時の友達との関わりを深める。	《教育課程上の位置付け》 生活単元学習 《本時のねらい》 ・簡単なおやつを協力して調理する活動を通して、コミュニケーションを図り、互いのことを知ることができる。

具体的な手立てとして、在籍校担任と居住地校担当者は、教員及び支援員がそれぞれの役割を確認し、全体や個別の生徒の状況を見ながら連携を図るようにすること、学習の振り返りをする際に、交流を通じた様子を基に、対象生徒、居住地校生徒に対し、それぞれのよかった点を伝えるようにすること等を確認しています。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導入	1 あいさつをし、自己紹介を行うと共に、めあてを提示する。 調理実習を通して、コミュニケーションを図り、互いのことを知ろう。	○互いを知るために、学年と名前を発表させる。
展開	2 調理実習を行う。 （1）団子作りとドーナツ作りのグループに分かれて調理をする。 （2）会食をする。 （3）片付けをする。	◎各グループに教師及び支援員がつき、分量を量る等の場面で個に応じて支援する。 <b>【②-1】</b> ○特に、調理用具の置く場所や置き方、コンロの使用前後の器具栓等を確認する。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	○めあてに即して個々の生徒のよさを具体的に示すようにする。

対象生徒は、初めての交流に緊張している様子でしたが、事前に調理活動や本時学習のめあてを確認していたことで、すぐに慣れることができました。対象生徒が得意な団子作りの活動を取り入れていたことから、調理室から離れることなく、無理なく居住地校生徒と活動することができています。

また、居住地校では、対象生徒のペースを大切にしながら活動を進めていく雰囲気を作られており、対象生徒は、特別支援学級の生徒との交流の他、休み時間には通常の学級の生徒とも楽しく交流することができています。小学校の時の友達と再会することができたことで、対象生徒もうれしそうでした。

実施後、居住地校では、活動の様子を校内に掲示したり、この日の活動を特別支援学級における作業学習（写真立ての制作）につないだりしています。

在籍校担任、居住地校担当者及び支援員は協議を行い、次回も特別支援学級の生徒との交流を継続することにしました。対象生徒が居住地校に慣れてきている様子が見られるため、在籍校担任と居住地校担当者は、次回の居住地校交流での対象生徒への支援の方法を改めて検討することにしました。

10月（2回目）

生活単元学習 単元「さつまいもを使ったおやつを作ろう」

対象生徒	居住地校生徒
<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>生活単元学習</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援学級の生徒と一緒に蒸しパン作りをすることができる。</li> <li>・友達の蒸しパン作りを見ながら自分で作ろうとすることができる。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>生活単元学習</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・季節の野菜を使って、おやつを協力して調理する活動を通してコミュニケーションを図る。</li> </ul>

前回の交流を踏まえた具体的な手だてとして、在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校での事前学習として、特別支援学級の生徒が調理に使用する芋を収穫しておくと共に、教室や廊下の掲示を季節感のあるものにするために飾り付けをしておくこと、全ての生徒をグループに分け、各グループに教師や支援員がついて個別に支援することを確認しました。

また、保護者に当日の様子を参観してもらい、今回はできるだけ対象生徒から離れた場所で活動を見守るようにしてもらい、できるだけ教師や支援員が適切な方法を考えながら支援を進めるようにしました。

## 展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項 (◎合理的配慮及び観点)
導入	1 めあてを確認する。 季節の野菜を使ったおやつ作りを楽しもう。	◎個々の生徒がめあてを意識できるようにする。
展開	2 調理実習をする。 (1) 4つのグループに分かれて調理実習をする。  (2) 会食をする。 (3) 片付けをする。	◎各グループに教師及び支援員がつき、分量を量る等の場面で個に応じて支援する。 <b>【②-1】</b> ◎できる限り自力で実習ができるようにする。
まとめ	3 本時の振り返りをする。	◎めあてに即して個々の生徒のよさを具体的に示すようにする。



今回も、対象生徒が得意な蒸しパン作りを取り入れた実習であったため、対象生徒は学習の場から離れず、居住地校生徒と活動の流れに沿って活動することができていました。全体の指導と個別の指導を分担する等、教師間の連携を図ったことも効果があったようです。

活動中に、対象生徒から進んで居住地校生徒に関わる場面はあまり見られないのですが、居住地校生徒からの誘いかけがあると適切に応じることができていました。

対象生徒は、この日、英語の学習にも参加しており、特別支援学級生徒と一緒にALTの指導によるゲーム活動にも参加することができています。対象生徒の保護者は、このような一連の活動を参観し、居住地校の取組の素晴らしさを実感しています。

対象生徒の様子から、在籍校担任と居住地校担当者は、今後は、活動中の教師からの言葉掛けをできるだけ少なくすることを確認しました。

2回の交流を通して、特別支援学級の生徒との交流は深まってきたようですが、更に関わりを広げていくために、在籍校担任と居住地校担当者は、今後は通常の学級での交流を検討することにしました。



**調理実習後に会食をする様子**

## 居住地校交流の実施を通して

対象生徒にとって、初めて居住地校で行われる学習であったため、当初は、対象生徒が環境に慣れるまでには時間がかかるのではないかと思われました。

しかし、在籍校担任と居住地校担当者が打合せを行い、事前学習や教材・教具の工夫を十分に行っていたこと、学習では各グループに教師及び支援員がつき、個に応じた支援を行ったこと等から、対象児童はすぐに居住地校の環境に慣れることができました。

居住地校の特別支援学級の生徒は、対象生徒に手助けをする等、積極的に関わろうとする姿も見られました。これまで、特別支援学級の生徒は、生徒同士が互いに関わり合う場面が限られていたのですが、交流を通じた経験を生かし、交流後は生徒同士の関わりが広がってきています。

また、交流が行われた調理室が、通常の学級の1年生教室の近くであったことは、通常の学級に在籍する小学校時の友達と、休み時間に自然な形で交流することにつながったようです。

更に、特別支援学級の生徒の中には、来年度進学する3年生の生徒がいたのですが、対象生徒の在籍校である特別支援学校を進学先として考えていることから、今回の交流は、該当生徒にとり、特別支援学校の教師や友達を身近に感じることができる機会にもなりました。

2回の交流の様子を参観した対象生徒の保護者は、対象生徒が初めての環境に慣れ、居住地校生徒と関わり合う姿を見ることで、居住地校における障害のある生徒に対する理解が進んでいることを感じています。居住地校の取組の素晴らしさを実感した保護者は、対象生徒と一緒に地域の行事にも積極的に参加するようになりました。

## (7) 「肢体不自由」小学部（一般学級）4年生児童

対象児童は、特別支援学校（肢体不自由）の一般学級に在籍する4年生です。移動の際は車椅子を使用しており、階段の昇降や排泄の際は支援が必要です。小学校に準ずる教育課程に基づき、該当学年の教科書を用いて学習しています。

対象児童の居住地校は、全校児童数776名の学校です。交流する4年生の児童数は159名（4学級）です。

### 昨年度までの状況

対象児童は、3年生であった昨年度、次のような年間目標を設定し、音楽・学級活動・外国語活動の各教科等の他、給食や昼休みも含めた居住地校交流を実施しています。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 同学年の集団の中で学習したり遊んだりすることにより、コミュニケーションの力や社会性を養う。	《年間目標》 対象児童との出会いや交流を通して、人との関わり方や共に学ぶ楽しさを学び、様々な見方・考え方を育てる。

#### 〔活動計画〕

	場所	教育課程上の位置付け	主な内容等
11月	音楽室、教室	(在籍校) 音楽、学級活動 (居住地校) 音楽、学級活動	リコーダー合奏、互いに自分のことを伝え合うカードトーキング
12月	教室	(在籍校) 総合的な学習の時間、給食、昼休み (居住地校) 外国語活動、給食、昼休み	英語を使った簡単なゲーム
3月	教室	(在籍校) 学級活動 (居住地校) 学級活動	お楽しみ会

3月の交流は対象児童の欠席により中止となり、年2回の実施となりましたが、対象児童、居住地校児童の姿を通し、次のような成果がみられました。

対象児童	居住地校児童
○打ち解けた雰囲気の中で活動ができた他、普段は経験する機会が少ない当番活動の経験ができた。	○対象児童の立場に立って関わる姿が見られた。

交流後は、対象児童と居住地校児童との間で年賀状のやりとりが行われる等、学校外でもつながりがみられています。在籍校担任、居住地校担当者は、今後に向けて、事前の打合せを早めに行い、より内容を充実させることにしました。

## 本年度の年間目標

保護者は、給食や休み時間を含め、体育以外の教科の学習に参加することを希望しています。

居住地校交流が継続されることになり、在籍校担任、居住地校担当者は、これまでの実施状況や保護者の願いを基に、次の年間目標を立てました。

対象児童	居住地校児童
《年間目標》 ・同学年の集団の中で学習したり遊んだりする事により、コミュニケーションの力や社会性を養う。	《年間目標》 ・交流を通して、障害に対する理解を深め、思いやりの心を育てることができる。

年間目標を基に、本年度は、対象児童と居住地校児童の関わりを広げるため、学年全体で行う社会科見学や学習発表会を中心とした交流を実施することにし、社会・音楽・国語の各教科において居住地校交流を実施することとしました。

在籍校担任と居住地校担当者は、居住地校児童には、対象児童の周りで走ったり暴れたりしないように事前に指導しておくこと、対象児童が車椅子で移動する際は、互いの児童がコミュニケーションを楽しみながらも、安全に移動できる間隔を確保するため、車椅子の操作は教師が行うことを確認しました。

## 居住地校交流の実際

9月（1回目）

社会 単元「水道の水はどこからくるの」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 社会 《本時のねらい》 ・安全で大量の水を作る浄水場の働きや各家庭に水を供給する仕組みについて調べ、水道の仕事に関わる人々の工夫や努力が分かる。 ・同学年の友達と一緒に見学をしたり、友達の発表や質問を聞いたりすることで知識や考え方を広げることができる。	《教育課程上の位置付け》 社会 《本時のねらい》 ・安全で大量の水を作る浄水場の働きや各家庭に水を供給する仕組みについて調べ、水道の仕事に関わる人々の工夫や努力が分かる。 ・目的をもって、仲間と共に見たり聞いたりして、浄水場や消防署について調べることができる。

在籍校では経験が難しい社会科見学での交流です。当日は、居住地校の第4学年児童全員とバスに乗って移動し、浄水場と消防署を見学します。実施に当たり、在籍校担任と居住地校担当者は、対象児童が車椅子で安全に通ることができるコースを双方で事前に下見しておくことを確認しました。

## 展 開

学習活動と内容	指導上の配慮事項(◎合理的配慮及び観点)
1 見学のめあてを確認する。	
2 浄水場や消防署を見学する。 (行程) 小学校発 ↓ 浄水場 ↓ 消防署 ↓ 小学校着 ※昼食	◎バスで移動する際は、乗り降りがしやすいように、対象児童の席を一番前にし、対象児童の後ろの席を昨年度の交流から親しくなっている居住地校児童の席にする。 <b>【①-2-3】</b> ◎施設見学の際は、目線の高さや移動する速さがほぼ同じ居住地校の車椅子を使用する児童と一緒に行動させるようにする。 <b>【①-1-1】</b>
3 見学でわかったことを振り返る。	

昨年度から交流を実施していたため、当該学年の居住地校児童が対象児童のことを知っていたこと、目線の高さや移動する速さがほぼ同じ車椅子使用の居住地校児童と一緒に行動したこと、階段の上り下りの際、バスの運転士や消防署員の方の協力もあったことで、対象児童も不安なく社会科見学に参加することができました。対象児童は、学習したノートを居住地校児童と見せ合う等しながら見学したことを確かめ合っており、対象児童にとっては、様々な考えをもつ友達がいることを知るための貴重な場となりました。

居住地校児童も、対象児童に積極的に声をかける姿が見られ、対象児童と情報を交換する姿が見られました。

今回の社会科見学では、対象児童がスムーズに活動に参加することができましたが、関わる居住地校児童が限られていました。そこで、在籍校担任と居住地校担当者は、次回はより多くの居住地校児童と関わるようにするために内容を検討することにしました。



浄水場の職員の説明を聞く様子

11月（2回目）

音楽 題材「音楽劇をしよう」

対象児童	居住地校児童
《教育課程上の位置付け》 音楽 《本時のねらい》 ・文化祭りの学年練習に参加し、大勢で合唱したり、呼びかけのせりふを行ったりすることができる。	《教育課程上の位置付け》 音楽 《本時のねらい》 ・文化祭りの練習を通して、様々な個性をもつ友達と一緒に全員で一つのものを作り上げる喜びや達成感を味わう。 ・相手を思いやる行動をとることができる。

居住地校で行われる文化祭りの出し物の学年練習に参加します。具体的な手だてとして、在籍校担任と居住地校担当者は、事前に発表の台本と楽譜を基に在籍校で歌や発表の練習をしておくこと、対象児童のステージでの並ぶ位置を最前列にすること等を確認しました。

展 開

過程	学習活動と内容	指導上の配慮事項（◎合理的配慮及び観点）
導 入	1 本日の練習と文化祭りの校内リハーサルについて確認する。	○対象児童も文化祭りの校内リハーサルに参加することを確認する。
展 開	2 音楽劇の練習をする。	◎対象児童が並ぶ位置を前列にし、スムーズに入退場ができるようにする。 【①-1-1】 ◎休憩時、対象児童は多目的トイレを使用し、在籍校担任が援助する。【③-1】
ま と め	3 練習の振り返りをする。	○互いのよさについて気付いたことを出し合わせる。

対象児童は、台詞や合唱を暗記して発表することができ、振り返りでは、「みんなの歌声や台詞が響いて良かった」等、感想を発表することもできました。学年全体の学習にも緊張せずに交流を楽しめるようになってきたようです。今回の交流を通し、対象児童は、周りの友達とタイミングを合わせることで、大勢で力を合わせて発表に取り組む喜びを経験することができました。

居住地校児童も、集合前や休憩時間に対象児童と挨拶やハイタッチを交わす等、積極的に関わろうとする児童が多くなってきました。

11月（3回目）

対象児童は、文化祭のリハーサルに参加した後、学級単位で行われる国語の学習にも参加します。

音楽 題材「音楽劇をしよう」〔1～3校時〕

対象児童	居住地校児童
<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>音楽</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化祭のリハーサルに参加し、大勢の前で合唱したり、呼びかけのせりふを言ったりすることができる。</li> <li>・いろいろな学年の発表を見て、上級生への憧れをもったり、下級生の発表のよさや頑張りに気付いたりすることができる。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>音楽</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化祭の練習を通して、様々な個性をもつ友達と一緒に全員で一つのものを作り上げる喜びや達成感を味わう。</li> <li>・いろいろな学年の発表を見て、それぞれの発表のよさや頑張りに気付くことができる。</li> </ul>

対象児童は、合唱や呼びかけの台詞について前回までに自信をつけていたため、リハーサル当日も、大きな声で発表することができました。リハーサル後には居住地校の教師にもほめられ、更に自信を深めることにつながりました。

この日は、他学年の発表も行われ、対象児童が参加していることは事前に他学年の児童にも周知されていたこともあり、対象児童は安心して他学年の発表を見学することができました。

課題としては、車椅子使用の児童が移動する際の動線やタイミングが明確でなかったことがあげられ、在籍校担任と居住地校担当者は、今後に向けて検討することにしました。

国語 題材「ディベートゲームをしよう」〔4校時〕

対象児童	居住地校児童
<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>国語</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的に応じて、理由や事例を挙げながら筋道を立てて話すことができる。</li> <li>・互いの考えの共通点や相違点を考えながら聞くことができる。</li> </ul>	<p>《教育課程上の位置付け》</p> <p>国語</p> <p>《本時のねらい》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手や目的に応じて、理由や事例を挙げながら筋道を立てて話すことができる。</li> <li>・互いの考えの共通点や相違点を考えながら聞くことができる。</li> </ul>



## 4 居住地校交流に関するQ & A

Q 1 居住地校交流をスムーズにスタートし、円滑に進めていくためには、どうすればよいでしょうか。

### ○ まずは、管理職の連携を

居住地校交流をスムーズにスタートするためには、まずは、両校の管理職が連携を図ることが重要です。例えば、在籍校の管理職が居住地校を訪問し、学校の状況や子どもの障害の状態などについて情報交換をしたり、両校の担当者の情報や連絡経路を確認したりするなど、その後の連携が円滑に進むような道筋を作ることが大切です。管理職の理解と協力が、居住地校交流を円滑に進めていく上では、欠かすことはできません。

Q 2 在籍校と居住地校、両校の担当者同士の連携の仕方について教えてください。

### ○ 事前・事後の打合せを綿密に

両校の事前の打合せは、有意義な活動を行うためにとても大切です。打合せの際は、在籍校の担当者が直接、居住地校を訪問し、教室環境等を把握しながら、「個別の教育支援計画」に基づいて児童生徒の実態、本人・保護者の願い等を説明するとともに、打合せシート等を活用しながら交流のねらい、内容、回数、配慮事項等について協議します。この協議を通して、計画書等を両校で作成していきます。また、居住地校の担当者が在籍校を訪問し、対象児童生徒が、日頃どのような環境で、指導・支援を受けているのかを知ることでも大変有効といえます。

### ○ 専門的なアドバイスを参考に

在籍校の教員は居住地校の教員に対して、指導上の配慮等で気付いたことを述べたりするなど、よりよい指導のためにアドバイスすることも重要です。

**Q 3 居住地校交流の計画や実施に当たって、本人・保護者の希望をどこまで受け入れることが必要ですか。**

**○ 本人・保護者の希望に配慮しつつ、計画的な交流を**

居住地校交流は、児童生徒本人・保護者の希望により実施されるものです。まず、在籍校の担当者は、本人・保護者と面談等を行い、交流に対しての希望等を把握します。その後、両校による事前の打合せの中で、具体的な活動内容を検討し年間指導計画を作成していくことになります。

本人・保護者の希望する活動内容、交流の回数などについては、そのすべての要望に応えるのは困難な場合もあります。在籍校における学習に支障が出ないように配慮しながら、児童生徒の成長にとって、どのような内容が適切なのか、在籍校の担当者、居住地校の担当者、本人・保護者の三者が十分に話し合い、有意義な内容となるよう計画を立てることが大切です。

なお、交流の回数については、年間3回程度を基本とします。

**Q 4 実施の際の送迎や付添は、誰が行いますか。**

**○ 付添は、特別支援学校の教員が行います**

居住地校交流については、在籍校の教員が付き添うことを原則としています。児童生徒の実態を把握した担任が付添を行うことが望ましいのですが、在籍校に残っている児童生徒の授業の実施という観点から、すべての交流の付添ができない状況も考えられます。そこで、担任の付添が困難な場合は、在籍校内で調整を行う必要が生じます。児童生徒の実態によっては、在籍校の教員と共に保護者が付添を行うこともあります。児童生徒の主体的な関わりという観点で支援することが大切になってきます。

**○ 送迎は、保護者に協力を求めます**

居住地校交流の実施に係る送迎については、保護者が行うことを原則としています。活動時間によって、在籍校と居住地校との間、自宅と居住地校との間など、様々な場合がありますが、居住地校交流は保護者の協力を得ながら進めていくことが大切です。

**Q 5 居住地校交流実施に当たって、居住地校の施設面が整備されていない場合は、どうしたらよいでしょうか。**

**○ 施設面の整備が前提条件ではなく、柔軟な対応を**

居住地校の中には、トイレ、スロープ、手すり等の施設設備面の整備がなされていない学校もあります。このような場合は、両校の話し合いにより、トイレ、階段、机、移動などについて、できる範囲の配慮や工夫で対応することになります。

具体的な合理的配慮や工夫に関しては、児童生徒個々の障害の状況により様々であり、在籍校の担当者、保護者との話し合いにより具体的に対応します。

また、肢体不自由の児童生徒だけではなく、視覚障害や聴覚障害の児童生徒の交流でも、設備等の配慮が必要な場合があります。

視覚障害の児童生徒には、危険な段差等の解消が望まれますが、これは、最初の交流の際に、校舎内外を両校の教師と共に歩きながら気を付ける箇所を丁寧に説明していくことで、ある程度解決できます。

また、聴覚障害の児童生徒には、椅子・机の脚に騒音防止用のテニスボールをはめたり、FM補聴器を使用したりするなどの合理的配慮も考えられます。

**○ 社会での自立を視野に**

なお、バリアフリー化が進んできているとはいえ、公共施設が常に障害のある人に使いやすく整っているわけではありません。障害のある人は、実社会ではその現状で工夫し、協力依頼や自力対応などで生活しています。したがって、施設の改善を要請することも大切ですが、すべての条件が整わなければ、居住地校交流ができないというのではなく、できる限りの合理的配慮や工夫をしながら実施していくことが大切です。

また、居住地校の児童生徒に「心のバリアフリー」がしっかりと育まれていれば、施設設備面の不十分さの一部をカバーすることもできます。

**Q 6 居住地校交流で直接交流を行う場合、居住地校では、特別な授業をするのですか。**

**○ 日常の学習活動を基本に、よりていねいに**

毎回、特別な活動を設定することは、居住地校にとって大きな負担となり、交流そのものが長続きしない可能性があります。時には「お楽しみ会」等の特別な活動を設定する必要もありますが、在籍校の児童生徒が参加しやすい内容を居住地校の日常の学習活動から選定していくことを基本とします。

児童生徒が音楽を好む子どもであれば、音楽の授業での交流、体を動かすことが好きな子どもであれば、体育の授業での交流など、日常の学習活動の中でどのような交流ができるのかを考えていくことが大切です。

**○ 休み時間などの活用も**

休み時間など、居住地校にとっては教育課程外の活動であっても、在籍校の教育課程や個別の指導計画に基づいた内容であれば、活動として設定することができます。休み時間を共に過ごしたり、協力して掃除を行ったりすることで、子ども同士の関わりをより深めることもできます。

また、居住地校においては、事前・事後の学習を教育課程に位置付けることが困難な場合があります。各教科等の時間だけでなく、朝の会や帰りの会の時間なども活用しながら、計画的に進めていくことが大切です。

**Q 7 在籍校の担任が引率した場合、当該学級の他の児童生徒の指導は、どうすればよいでしょうか。**

**○ 校内での組織的な支援体制を**

在籍校の担任が付添等を行った場合、当該学級の他の児童生徒の指導に支障が出ないようにしなければなりません。付添については、校内で組織的な支援体制を整えておく必要があります。場合によっては、ボランティア等の活用を検討することも必要です。

**Q 8 対象児童生徒が怪我をしたり、事故が起きたりした場合の責任の所在はどこにありますか。**

○ **原則的な責任は、特別支援学校に**

居住地校交流は、在籍校である特別支援学校の教育課程に基づいて計画的に実施されますので、怪我や事故の場合は、原則として在籍校の責任となります。

ただし、児童生徒の送迎については、保護者が行うことを原則としています。保護者の責任の下、安全に十分留意して行います。

**Q 9 実施中の怪我や器物破損等の場合、保険の対象となりますか。**

○ **まず、安全確保を十分に**

居住地校交流に係わる送迎及び交流活動については、「学校管理下での活動」に該当します。したがって、実施の際の児童生徒の怪我に対しては、日本スポーツ振興センターの災害共済給付制度の対象となります。

器物破損等の場合は、児童生徒が個人で加入している保険（任意保険）で対応することになります。

しかし、何よりも大切なのは事故防止ですので、日頃から在籍校と居住地校が連絡を密にし、児童生徒の健康安全面及び施設設備の安全確保に十分留意しながら実施することが重要となります。

**Q10 実施中の火災などの緊急時の対応はどうなりますか。**

○ **緊急時安全マニュアル等の確認を**

児童生徒の移動及び活動の際は、特に安全に配慮するとともに、緊急時は、居住地校の「緊急時安全マニュアル」等に基づき、居住地校職員との連携を図りながら対応します。

**Q11 実施の際、出席簿等の記載はどうしますか。また、在籍校の休業日に居住地校交流を行った場合はどうなりますか。**

**○ 出席簿等の記載は在籍校での扱いに**

居住地校交流は、在籍校である特別支援学校の教育課程に基づいて実施されますので、原則として、出席簿、指導要録上も出席として取り扱い、出席日数に加えます。

ただし、例えば居住地校の運動会に参加するなど、在籍校の休業日に居住地校交流を行った場合は、在籍校の学校行事としては扱うことができません。授業日と休業日との振替は行わず、授業日数、出席日数には含めません。

**○ 在籍校の休業日に居住地校交流を実施する場合の留意点**

在籍校の校長と居住地校の校長が十分協議し、実施の有無を判断することになります。その際、次の点に留意します。

- ① 在籍校の教育活動に支障が出ないようにすること。
- ② 特別支援学校の教員の付添が可能かどうか確認すること。
- ③ 送迎や付添について、保護者の協力を得ること。
- ④ 児童生徒の体力面や健康面に配慮し、無理のない計画を立てること。
- ⑤ 教育課程上の位置付けを明確にし、個別の指導計画に基づいた目標の達成を図ること。

**Q12 居住地校交流の学習内容として、遠足などの校外学習をしてよいでしょうか。**

**○ 安全面に注意を**

在籍校の教員の引率が可能で、校外学習の内容が適切であり、児童生徒の身体的負担等を考慮し、両校の校長が認める場合は、校外学習を実施することができます。

ただし、双方の学校で下見をするなど、安全面には十分留意して行う必要があります。

# 資料編

- (様式 A) …… 北九州市における居住地校交流の実施希望者について
- (様式 B) …… 居住地校交流の実施希望者について
- (参考様式 1 号) …… 実施希望書
- (参考様式 2 号) …… 打合せシート A 【アセスメント】
- (参考様式 3 号) …… 打合せシート B 【年間指導計画の作成】
- (参考様式 4 号) …… 打合せシート C 【活動ごとの指導計画の作成】
- (参考様式 5 号) …… 打合せシート D 【評価・改善】

(様式 A)

公印省略

文 書 番 号  
平成 年 月 日

教育庁教育振興部義務教育課長 殿

福岡県立 特別支援学校長

北九州市における居住地校交流の実施希望者について（提出）

このことについて、下記のとおり提出します。

記

ふりがな 児童生徒氏名	性別	教育部門・学部・学年・学級	居住地校

(様式 B)

公印省略

文 書 番 号  
平成 年 月 日

〇〇市（町・村）教育委員会教育長 殿

福岡県立 特別支援学校長

居住地校交流の実施希望者について（依頼）

このことについて、下記のとおり居住地校交流実施の希望がありました。

については、貴管下の関係小・中学校にお知らせいただくとともに、居住地校交流の円滑な実施についてご協力くださいますようお願いいたします。

記

ふりがな 児童生徒氏名	性別	教育部門・学部・学年・学級	居住地校

(参考様式1号)

平成 年 月 日

県立 学校長 殿

保護者氏名

印

平成 年度 居住地校交流 実施希望書

このことについて、下記のとおり居住地校交流の実施を希望します。

1	ふりがな 児童生徒氏名	
2	教育部門・ 学部・学年・組	教育部門 学部 年 組
3	保護者名	
4	住 所	
5	居住地校名	立 学校
6	希望する 活動内容	

## 居住地校交流 打合せシートA【アセスメント】

記入者 ( )

打合せ日時	平成 年 月 日 ( ) : ~ :
打合せ場所	
参加者	【在籍校】
	【居住地校】

## 1 対象児童生徒等

対象児童生徒名		性別	( 男 ・ 女 )
《在籍校》 教育部門 学部・学年等	( ) 教育部門 ( 小 ・ 中 ) 学部 年 組 (学級在籍児童生徒 名) (一般学級・重複学級・訪問教育)		
《居住地校》 学校・学年等	立 小・中学校 学年 組	(全校児童生徒数 名) (学級在籍児童生徒 名)	
障害の状態等			
本人・保護者が希望する内容等			
安全上、特に配慮を要する事項			

## 2 居住地校の施設・設備等

確認事項	内 容	備考欄
<input type="checkbox"/> 在籍校からの距離 (移動に要する時間)	約 km (移動に要する時間:約 分)	
<input type="checkbox"/> 移動手段	徒歩・自家用車・( )	
<input type="checkbox"/> 駐車可能スペース	有 ・ 無	
<input type="checkbox"/> スロープ	有 ・ 無	
<input type="checkbox"/> エレベーター等	有 ・ 無	
<input type="checkbox"/> トイレ	和式・洋式・車椅子対応	
<input type="checkbox"/> 実施場所	階	
<input type="checkbox"/> 保健室の借用	可 ・ 不可	
<input type="checkbox"/> 緊急時の病院	病院 (TEL: )	
<input type="checkbox"/> その他		

### 3 確認事項

	確認事項	記述欄
在籍校	<input type="checkbox"/> 配慮を要する事柄の整理 居住地校への連絡	
	<input type="checkbox"/> 実施計画に関する教員の共通理解	
	<input type="checkbox"/> 対象児童生徒への事前指導	
	<input type="checkbox"/> 対象児童生徒への事後指導	
	<input type="checkbox"/> 対象児童生徒の評価の方法	
居住地校	<input type="checkbox"/> 配慮を要する事柄の把握 手立ての検討	
	<input type="checkbox"/> 教職員、保護者等への理解啓発	
	<input type="checkbox"/> 実施計画に関する教員の共通理解	
	<input type="checkbox"/> 児童生徒への事前指導	
	<input type="checkbox"/> 児童生徒への事後指導	
	<input type="checkbox"/> 居住地校児童生徒の評価の方法	

## 居住地校交流 打合せシートB【年間指導計画の作成】

記入者 ( )

打合せ日時	平成 年 月 日 ( ) : ~ :
打合せ場所	
参加者	【在籍校】
	【居住地校】

## 1 交流及び共同学習のねらい（年間目標）

対象児童生徒	居住地校児童生徒
《年間目標》	《年間目標》

## 2 活動計画（直接的な活動）（年間3回）

回数	時期	場所	教育課程上の 位置付け	主な内容
1回目			【在籍校】 【居住地校】	
2回目			【在籍校】 【居住地校】	
3回目			【在籍校】 【居住地校】	

## 3 その他（間接的な活動）

時期	主な内容

## 居住地校交流 打合せシートC【活動ごとの指導計画の作成】

記入者 ( )

打合せ日時	平成 年 月 日 ( ) : ~ :
打合せ場所	
参加者	【在籍校】
	【居住地校】

### 1 事前学習

対象児童生徒	居住地校児童生徒

### 2 活動計画(案)

〇〇〇市・町立〇〇〇小・中学校 指導者 〇〇〇 〇〇〇  
(県立〇〇〇特別支援学校 指導者 〇〇〇 〇〇〇)

(1) 題材・単元名

(2) 本時 平成 年 月 日 ( ) : ~ : 年 組教室

(3) 本時のねらい

対象児童生徒	居住地校児童生徒

(4) 本時の展開

過程	学習活動・内容	指導上の配慮事項(◎合理的配慮及び観点)
導入	1 <div data-bbox="263 492 1374 571" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">めあて</div>	
展開	2	
まとめ	3	

3 事後学習

対象児童生徒	居住地校児童生徒

## 居住地校交流 打合せシートD【評価・改善】

記入者 ( )

打合せ日時	平成 年 月 日 ( ) : ~ :
打合せ場所	
参加者	【在籍校】
	【居住地校】

### 1 教師の支援の振り返り

指導の観点	記述欄
<input type="checkbox"/> 本時のねらいは達成できたか。	
<input type="checkbox"/> 本時のねらいは適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 活動内容は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 教材・教具は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 教示方法は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 子どもへの支援は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 安全面の配慮は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 教師間の連携はとれたか。	
<input type="checkbox"/> 場面設定は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 時間配分は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 活動場所・施設は適切であったか。	
<input type="checkbox"/> 児童生徒の相互理解は進んだか。	

### 2 児童生徒に関する評価 (成果○ : 課題●)

対象児童生徒	居住地校児童生徒

### 3 次回に向けての改善点

- ・
- ・
- ・

【 参考文献・資料等 】

- ・「特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）」  
文部科学省 平成 21 年
- ・「交流及び共同学習事例集」 全国特別支援教育推進連盟 平成 19 年
- ・「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別  
支援教育の推進（報告）」 文部科学省 平成 24 年
- ・「副学籍による交流教育実施の手引き」 横浜市教育委員会 平成 19 年

※ この「居住地校交流実施の手引」は福岡県教育委員会のホームページでも  
閲覧及びダウンロードできます。

福岡県教育委員会ホームページ <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/2100000.html>